

なげの詞なれどせちに心にかくいらねど  
 思ひいれずいふ詞深くに心にかくいらね  
 して思ひいたる事ならねども。情しき  
 詞を陰ごにもいふべき事との心  
 いかで此人に思ひしりけりとも。被陰ご  
 になさけしくいひたる情しさを思ひ知たり  
 さいふほどの心ざしを見せたき思ふこと  
 必思ふべき人さふべき人は  
 前段はいさほしきも哀共さしていふべき人  
 ならぬが情しく陰にていひたる也。こゝは  
 必思ふべき故も有せふらふべき故もある人  
 の事

さりわかれしもせず  
 もさより思ふべき人さふべき故もある人な  
 れば。たさひ思ひ訪へるさても取分て情し  
 とも思はれずさ  
 人のうへいふをばらだつひさこそ。此段は  
 坐興には人の噂いふ事もあるを。人の上い  
 ふは一向にやからぬ事と聞腹立人はわりな  
 く由なき事をいふ  
 いかでかはあらん。我身を置て人の上をい  
 ひたき物はいかでかはあらん。次の詞を  
 いはんとて先いふことば  
 我身をばさしおきて

我身にも懸き事ある物を。それをさしおき  
 てさやうに人の上をもどかしくいひたき物  
 はあらん。畢竟坐興にていふ物を。一  
 向にさし腹立はわりなきこといふこと  
 されどけしからぬやうにも  
 然ども人の噂をいふはけしからぬやうにも  
 有さ。此段は坐興ながら人の噂はよる  
 しからぬの事をたちかへりいふ

たくおほゆれ。なげの詞なれど。せちに心にかくいらね  
 ど。いとほしき事をいとほしとも。あはれなるをはけにい  
 かに思ふらんなどいひけるを。つたへて聞たるは。さしむ  
 かひていふよりうれし。いかで此人に思ひしりけりと  
 も見えにしがな。つねにこそおほゆれ。必思ふべき人と  
 ふべき人は。さるべき事なれば。とりわかれしもせず。さ  
 さやうにさし思ふべき故もなき人の我にうしろやすきしいらへする  
 もあるまじき人のさしいらへをも。心やすくしたるはう  
 れしきわざ也。いとやすき事なれば。更にえあらぬ事ぞか  
 し。大かた心よき人のまことにかどなからぬは男も女も  
 ありがたき事なめり。又さる人もおほかるべし。人のうへ  
 いふを腹だつ人こそいとわりなけれ。いかでかはあらん。  
 我身をさしおきて。さばかりもどかしくいはまほしき物  
 やはある。これどけしからぬやうにもあり。又おのづから  
 聞つけてうらみもぞする。あひなし。又思ひはなつまじき

あたりは。いとほしなど思ひどけはねんじていはぬをや。  
 さだになくばうちいでわらひもしつべし。人のかほにど  
 りわきてよしと見ゆる所は。たびことに見れどもあなを  
 かしめづらしとこそ覺ゆれ。あなどあまたたび見ればめ  
 もたしづかし。ちかうたてる屏風のゑなどは。いとめでた  
 近くてたびくみる故  
 是は初めいへる事をかされていふ  
 けれども見もやられず。人のかたちはをかしうこそあれ。  
 人のかたのたさへ  
 見くけなるでうごの中にも。一つよき所のまもらるよ。  
 形は悪き人も又一所は人のこのむ所あらんさみづから思ふ心  
 見にくきもそこそはあらめと思ふこそわびしけれ活本に是  
 うれしき物

又おのづから。又彼噂いはれし人の自然は  
 聞付眼る事もあるべければ。坐興にも人の  
 噂は無愛事と  
 又思ひはなつまじきあたり  
 又たさひ思ふまひ有ても。え思ひ捨見  
 はなつまじき人の事は。いさほしや。人さ  
 してはさやうの事もなごかならん。なご  
 了解し思ひさければ。噂にそしりたき事も念  
 ずこらへてはぬ物をさ。やは助字と。  
 此段は思ふ人の事は陰うはさにもいはず。  
 只なる人のうへを噂にはいふ事ないへる  
 さだになくば。さやうにだになくば。思  
 ひはなつまじき故だになき人の上ならば。  
 魚興にはいひ出て笑ひもせん物をさ。是  
 は亦人のうへいふをばらだつ人のわりなき  
 事を立かへりいひたる詞と。こゝもさの詞  
 よく心なごめて見るべし

まだ見ぬ物がたりのおほかる。又一つを見ていみしうゆ  
 かしうおほゆるものがたりの。二見つけたる。心おどりす  
 一の巻はなまき有んこと  
 破捨たる  
 るやうもありかし。人のやりすてたる文を見るに。おなじ  
 つつきあまた見つけたる。いかならんと夢を見て。おそろ  
 しとむねつゝるよに。ことにもあらずあはせなどしたる  
 凶事ならぬと占合たる



我に御らんとあはせて  
人々あまたの中に。我に貴人の御目を見合  
せてかたりきかせ給ふ

うちきいなどに 問書の事よし後書郎の  
腕にあり  
みづからうへには 清少の身には歌ほめ  
られし事はなけれど。鶴しからんさおしは  
いらるいさ

かのいひたりし人をかしき  
此書を見てこそいはれけりと思ふに心にて  
おもしろき

いどうれし。よき人の御前に人々あまたさふらふ折に。昔  
ありける事にもあれ。今きこしめし。世にいひけることに  
もあれ。かたらせ給ふを。我に御覽じあはせてのたまはせ。  
いひきかせ給へるいどうれし。とほき所はさら也。おなじ  
都のうちながら。身にやんごとなく思ふ人のなやむをき  
て。いかにくどおほつかなく歎くに。おこたりたるせ  
うそこえたるもうれし。思ふ人の人にもほめられ。やんこ  
となき人などの口をしからぬ物におほしの給ふ物のを  
り。もしは人といひかはしたる哥の聞えてはめられ。うち  
きいなどにほめらる。みづからのうへにはまだしらぬ  
事なれど。なほおもひやらる。よ。いたううちとけたらぬ  
人のいひたる古き事のしらぬを。聞出たるもうれし。後に  
物のなかなどにて見つけたるはをかしう。たゞ是にこそ  
ありけれ。とかのいひたりし人をかしき。みちの國がみ。

哥の上旬下旬。源氏早御登に。はかなき  
ことなもと末をとりていひかはしとあり  
ごみに物もさむる見出  
イニひ出たる。急に物を尋るに其有所を  
知たる人のいひきかせし  
物合せ何れか  
哥合せ何れかやさいとむ。職イドム  
あらそふ心  
「訂」此所の詞「物あはせ何れさいとむ事」に  
かちたるいひで「うれしからん」さあ  
るを。異本には「物のをりに衣うたはせて  
いかならんと思ふにきよらにてえたる」ま  
あり  
いみしう我はと思ひて  
我は人にたばかられしと賢がほなる人なた  
ばかり得たるがうれしき也。たはふれの  
たばかり事  
「訂」こいも。又いみしうより。男はまさりて  
うれしとあるまでの數十字を異本には左の  
如くあり  
「又もおほかる物のけが。日比月比しるき  
さありてなやみわたるが。おこたりぬるも  
れし」  
女ごちより。女同志の中にて其友の女を  
たばかりしよりは。男をたばかりしはうれ  
しき  
是がたうは必せんずらん  
其たはかる折に。かたはらの人々のたはか  
らる。人のかとうとせんと思ひしに。かた  
うとせざりし心なるべし。たうは無の字也。  
字彙云。問也。又相問也。非爲。問也。

○増訂枕草紙春曙抄卷之十

白きまきし。たゞのもの。しろうきよきはえたるもうれし。  
はづかしき人の哥のものとすとひたるに。ふどおほえた  
る。われながらうれし。つねにはおほゆる事も。又人のと  
ふにはきよく忘れてやみぬる折ぞおほかる。とみにもの  
もとむるに見出たる。只今見るべき文などをとめうし  
なひて。萬の物をかへすく見たるに。さがし出たるいと  
うれし。物あはせ。何くれといどむ事にかちたる。いかで  
かうれしからざらん。又いみしう我はと思ひてしたりが  
はなる人はかりえたる。女ごちより男はまさりてうれ  
し。是がたうは必せんずらんとつねに心つかひせらる。  
もをかしき。いとつれなく何とも思ひたらぬやうにて  
たゆめ過すもをかし。にくきもの、あしきめ見るも。つみ  
はうらんと思ひながらうれし。さしむすはせてをか  
しけなるも又うれし。思ふ人は我身よりもまさりてうれ



「増」或云。たうはたふにて答なるべし。註は  
甘心せず

濱按。蕭の字云。たうのかなにてよし。落  
くはにもあり

御前に人々所もなく 皇后定子の御まへに  
道あけてちかくめし入

なみおし人々の中をあけて清少をまほして  
めしよせし

御まへに人々あまた  
是より定子の御まへに侍し時の事を書し  
さる、筆すさび

かくてもまばしあり  
紙を大切に思ふからに遺世の心もやむと

命さへをしくなん  
前にかた時あるべき心ちもせでいへるに  
對して云。猶いつまでも世にながらへたき  
さ

おぼすて山の月は  
清少の心は紙疊にこそ慰むに。何人かおは  
捨の月になぐさむぞの御願言。「わが心  
なくさめられつさらしなやなばすて山にて  
る月をみて」

し。御前に人々所もなくあるに。今のほりたれば。すこ  
しどはき柱のもとなどにもたるを御らんじつて。こち  
れさ

こと仰られたれば。道あけて近くめし入たるこそうれし  
けれ。御前に人々あまた物仰らるゝついでなどにも。世の  
上らるゝ

中のばらだ、しうむつかしうかた時あるべき心ちもせで。  
いづちもく、いさうせなはやと思ふに。たゞの紙のいと  
しろうきよらなる。よき筆。白きまきし。みちのくに紙。など  
えつれば。かくてもまばしありぬべかりけりとなんおは  
え侍る。又かうらいべりのたゞみのむしろあをうこまか  
に。へりのもんあさやかにくろうしろ見えたる。引ひろ  
けて見れば。何か猶さららに此世はえ思ひはなつまじと。命  
さへをしくなんなると申せば。いみしくばかなき事も慰  
むさ清少の申せば

わらはせ給ふ。さふらふ人もいみしくやすきそくさいの  
御前の人々

命さへをしくなん  
前にかた時あるべき心ちもせでいへるに  
對して云。猶いつまでも世にながらへたき  
さ

おぼすて山の月は  
清少の心は紙疊にこそ慰むに。何人かおは  
捨の月になぐさむぞの御願言。「わが心  
なくさめられつさらしなやなばすて山にて  
る月をみて」

命さへをしくなん  
前にかた時あるべき心ちもせでいへるに  
對して云。猶いつまでも世にながらへたき  
さ

おぼすて山の月は  
清少の心は紙疊にこそ慰むに。何人かおは  
捨の月になぐさむぞの御願言。「わが心  
なくさめられつさらしなやなばすて山にて  
る月をみて」

命さへをしくなん  
前にかた時あるべき心ちもせでいへるに  
對して云。猶いつまでも世にながらへたき  
さ

おぼすて山の月は  
清少の心は紙疊にこそ慰むに。何人かおは  
捨の月になぐさむぞの御願言。「わが心  
なくさめられつさらしなやなばすて山にて  
る月をみて」

断念ぞと

いのりかなといふ。さてのちにはどへて。すゞろなる事を  
思ひて里にある比。めでたき紙を二十つゝみにつゝみて  
給はせたり。仰事にはどくまゐるれなどのたまはせて。是は  
きこしめしおきたる事ありしかはなん。わろかめれば。壽  
命經もえかくまじけにこそと仰られたる。いとをかし。む  
申せし事は忘るにさ

けに思ひ忘たりつる事を。おほしおかせ給へりけるは。な  
はたゞ人にてだにをかし。ましておろかならぬ事にぞあ  
るや。心もみだれてけいすべきかたもなければ。たゞ  
かけまくもかしこきかみのまゐるしにはつるのよはひに  
なりぬべきかな

あまりにやとけいせさせ給へとてまゐらせつ。大はん所  
のさうしぞ御使には來たる。あをきひとへなどぞとらせ  
て。まこと此かみをさうしにつくりて。もてさくらに。  
むつかしき事もまざるゝ心ちして。をかしう心のうちも

あまりにや  
あまりに愛加おそろしき鐘に  
やん

すゞろなる事を思ひて  
前にも清少の里居せし事あり。其比にや  
二十つゝみに  
訂渡按。二十は二帖をかながきにせるより  
の誤り。

弘云。或は二重に包むことにて。即ちちう  
と假名にのきしを誤りたるにもやあらん  
きこしめしおきたる事ありしかは  
清少の紙に命のぶるを聞召おかれてまいら  
せらるゝと

わろかめれば壽命經もえかくまどげにこそ  
前に清少は白く清らなる紙に慰む事をいひ  
し故。此紙はあられば命のぶるなぐさめ  
にもなるまどぎの心云。壽命經は。延命  
の新篇の經なれば

おぼすて山の月は  
清少の心は紙疊にこそ慰むに。何人かおは  
捨の月になぐさむぞの御願言。「わが心  
なくさめられつさらしなやなばすて山にて  
る月をみて」

おぼすて山の月は  
清少の心は紙疊にこそ慰むに。何人かおは  
捨の月になぐさむぞの御願言。「わが心  
なくさめられつさらしなやなばすて山にて  
る月をみて」

おぼすて山の月は  
清少の心は紙疊にこそ慰むに。何人かおは  
捨の月になぐさむぞの御願言。「わが心  
なくさめられつさらしなやなばすて山にて  
る月をみて」

おぼすて山の月は  
清少の心は紙疊にこそ慰むに。何人かおは  
捨の月になぐさむぞの御願言。「わが心  
なくさめられつさらしなやなばすて山にて  
る月をみて」



たいみ 是も清少の望みに應じて后宮の賜へるなるべし

御座さいふたいみ 貴人のしかり、疊さいふゆ心のうちにはさしやあらん 后宮の賜へるも清少の心には思ひしと

又いひに来なん これへまわらすた、みにあらずさいひ、宮のほとりにあないしに 后宮の御方などに同うかひまほしけれど、誰かやうのわさはせんたい后宮の御しはさならん

「訂」こゝに「宮のほとりにあないしにまわらせまほしけれど」とあるを、イ本、萬葉抄には「まもあらばうたて有べし」と思へば、あり

かゝる事なんある 清少より、疊もて来りし事を后宮の御心さしと問にやることば、さる事やけしき見給ひし 后宮の懸下されし御氣色は見給はずと

おほゆ。二月はかり有て。あかぎぬきたる男の。たゝみをもてきてこれといふ。あれは誰ぞあらはなりなど物はしたなういへば。さしおきていぬ。いづこよりぞとばすれは。まかりにけりどてどりのいたれば。こと更に御座といふたゝみのさまにて。かうらいなどときよら也。心のうちにはさしやあらんとおもへど。猶おほつかなきに。人ども出しもどめさすれどうせにけり。あやしがりわらへどつかひのなけはいふかひなし。所たがへなどならは。おのづからも又いひに来なん。宮のほとりにあないしにまあらせまほしけれど。猶たれするにさるわざはせん。仰事なめりといみしうをか。一日はかり音もせねば。うたがひもなく。左京のきみのもとに。かゝる事なんある。さる事やけしき見給ひし。忍びてありさまの給ひて。さると見えすは。かく申たりともなもらし給ひそといひやりた

のちにもさ 後に沙汰し給ふなごん

おもしもしるくをか。前にも心にさしにやあらんと思へどもあり。おほせ事なめりといみしうをか。なごいへる首尾なり

まごひしほごに 其使はまごひ隠れて歸りしと 關白殿 后宮の御父。中關白源隆公。法興院 二條の北東極の東。兼家公の家也。兼家公禱し給ひて後醍醐公。一に釋泉寺をたて給へり 女院 圓融院の后。一條院の御母。東三條院也 二條の宮へいらせ給ふ 法興院すなはち東二條也。こゝに后宮の御所をかりに作りしを二條の宮といふなるべし

るに。いみしうかくさせ給ひし事也。ゆめくまろがきこえたるどなく。のちにもとあれば。されはよど。おもひしもしるくをかしくて。文かきて又みそかに御前のかうらんにあかせし物は。まごひしほごに。やがてかきおとしてみはしのもとにちねけり

しすすべければ。二月朔日のほどに二條の宮へいらせ給ふ。夜ふけてねふたくなりしかは。何事も見れず。つとめて日のうらゝかにさし出たるほどに。おきたれば。いとしろうあたらしうをか。しけにつくりたるに。みすよりは。じめてきのふかけたるなめり。御しつらひ獅子とま犬などいつのほどにや入るけん。とぞをか。しき。櫻の一丈はかりにていみしう咲たるやうにて。みはしのもとにあれば。



つくりたるなめり  
 新古今雜上。後冷泉院御時御前にて既新成  
 櫻花一さいへる心をさあるを東野州院に作  
 花の事也云々  
 花の匂ひなききたるにおさらす  
 花のほのあかきを匂ひさいふ之「朝日影匂  
 へる山の櫻花」さよめるもおな心之  
 こいへなごいふ物の  
 小宮ごもをこぼちてそこに二條の宮を儀に  
 つくられたればさ  
 けちかくをかしげなる  
 かりの御所なればさのみけ高くはあられど  
 おもしろげなるさまさ  
 只御なほしにかされてぞ  
 直衣も直衣布袴さて。下裳を用らるゝ事あ  
 れど。是は只直衣斗なればなるべし  
 「訂」原本には只なほしとありて御の字なし。  
 イ本の有に從へり  
 かつも入りうもん  
 堅立敷也。イ本かつも入りうもんなど其  
 折は此八丈さいふたけたかはこになり  
 き。あるがぎりきたれば云々  
 「訂」弘云。活本にも此のイ本の如くあり

いとどうさきたるかな。梅こそたゞ今さかりなめれど見  
 ゆるは。つくりたるなめり。すべて花の匂ひなききたる  
 におとらず。いかにうるさかりけん。雨ふらはまほみなん  
 かしと見るぞ口をしき。こいへなごいふ物のおほかりけ  
 る所を今つくらせ給へれば。木だちなどの見所あるはい  
 まだなし。たゞ宮のさまぞけちがくをかしげなる。殿わた  
 らせ給へり。あをにびのかたもんの御さしぬき。櫻のなほ  
 しに。紅の御ぞみつばかり。只御なほしにかさねてぞ奉り  
 たる。御まへよりばじめて。紅梅のときさうすきかりもの。  
 かつも入りうもんなどあるかぎりきたれば。たゞひかり  
 みちて。からぎぬはもえぎ。柳。紅梅などもあり。御前に  
 させ給ひて。物など聞えさせ給。御いらへのあらまほしき  
 を。里人にわづかぬのぞかせはやと見奉る。女房ごもを御  
 覽じわたして。宮に何事をあはしめすらん。こゝらめでた

なべすまで 重居て  
 是家々のむすめぞかし  
 何もよき家の子ごもぞとこ  
 よくかへりみてこそ  
 船にいたはりつかひ給へまの心。幽淵明  
 彭澤の令まなりし時。其子に一方を送りて  
 いひつかはす書に云。今道三此力助。汝清水  
 之勢。此亦人子也。吾道之云々。この心に  
 て開白ごもの給へるにや  
 いかにいやくくものをしませさせ給ふ宮とて  
 后宮をさしての給ふ。開白ごのいたはふれ  
 ぬ。前段に后宮より清少に紙たいみなご給  
 へりし事を書て。こに此御たはふれを  
 其の心づかひ面白し。史記陳平が傳に。  
 其あにゆめ陳平をにくみて悪口して兄伯に  
 逐奪られし事を書て。後に陳平を識する者。  
 高祖に其嫂を登りさいひし。か偽の証させし  
 文法  
 何かしりうごこには開えん  
 かやうの流儀を何かは陰ごこにはいばん。  
 御前にてこそいはめこの儀  
 式部のせう何かし  
 勅物云。源朝理(正曆)正月十三日式部奏。前  
 大納言重光御四男。正曆四年職人十九。六  
 年叙。中宮御給

き人々を。なべすまで御覽することさうらやましけれ。  
 一人わろき人なしや。是家々のむすめぞかしあはれ也。よ  
 くかへり見てこそさふらはせ給はめ。さても此宮の御心  
 をはいかに知奉りてあつまりまらり給へるぞ。いかにい  
 やしく物をしませさせ給ふ宮とて。我は生れさせ給ひし  
 よりいみしうつかふまつれど。まだおろしの御ぞ一つ給  
 はぬぞ。何かしりうごこにばきこえんなどの給ふがをか  
 しきに。みな人々わらひぬ。まことぞ。をこなりとてかくわ  
 らひいまするかばづかしなどの給はするほどに。内より  
 御つかひにて式部のせう何かしまるれり。御文は大納言  
 どのどり給ひて殿に奉らせ給へは。ひきときて。いとゆか  
 はふれの給ふ  
 後宮の御氣色をあけて見たまはんは如何その心。開白殿の詞。帝の御文なれば。恐。ましとこ  
 れは。あやしうとあはいたり。かたじけなくもありもて  
 奉らせ給へは。とらせ給ひても。ひろけさせ給ふやうにも



あなたにまかりて行くの事物し侍らん  
帝の御文を父君の前にて后宮開きかれ給へ  
ば。使の膝裏いひ付んきて殿下たち給ふ心  
遣ひ面白し

御ぞのおなづい  
后宮の紅梅のきねさかみのいろさ

猶かうしもおしはかり  
后宮の御ありさまかく美麗ならんとは。元  
推量すまじきさ。前に里人にわづかにの  
ぞいせばやさいへる首尾さ

あがきみゆるさせ給へ  
我君御酒御免候へせん

三の御まへはみくしげ殿  
殿下の三女。后宮の御妹也。御殿殿別當な  
るべし。拾芥云。御座殿在。貞觀殿中。以三  
上臈女房。爲別當云々

うへなごきえんにそ  
三の君おほきに物くしければ。うへつ  
かたなど申べきには似合しきさ也  
「君」うへは敬語也。貴婦人を何々の上といふ  
と源氏に榮上榮上などいふが如し

あらずもてなさせ給ふ。御よういなどぞありがたき。すみ  
うちより使にぬよの心のまより女房しとねさし出て。三四人御几帳おんゐりのもとに  
たり。あなたにまかりて行くの事物し侍らんとてたうせ  
給ひぬるのち御文御らんず。御返しはこうはいの紙にか  
いせ給ふが。御ぞのおなじ色に匂ひたる。猶かうしもおし  
はかりまゐらする人はなくやあらんとぞ口をしき。けふ  
はこと更にとて。殿の御方よりろくは出させ給。女のさう  
なれば雲雲の紅梅のはそながをへたり。さかなうどあれは。あは  
さまはしけれど。けふぞいみじき事の行幸に。あが君ゆる  
させ給へと大納言どのにも申てたちぬ。君達などいみし  
うけさうし給ひて。こうはいの御ぞもおどらじとせ給へ  
るに。三の御まへはみくしげ殿也。中のひめぎみよりもお  
はきに見え給ひて。うへなごきえんにぞよかめる。うへ  
もわたらせ給へり。御几帳引よせて。あたらしくまゐりた

いぶせき心ちす 清少も新妻の内にて北の  
方の見え給はざりし

かの日のさうぞく殿  
女房達の一切御供養の日の出たる扇等の  
談合する也

まろは何が只あらんにまかせてか あまり  
にいとみて一向に手をつけぬやうにいふま  
ま。我は何か用意せん只あるにまかせん  
さ云て。たゆめて結露せんのみなり

かゝる事にまかづれば  
當日の用意のために退出すれば。后宮も御  
いさまを給はるさ

御前人すくなくればいさよし  
「訂」イ本には「御前人すくなくいていさよし」さ  
あり

弘按。こは原本イ本さほらうへへの相異  
なれど。此所は本のまゝの方よし

なきてわかれんかほに  
拾遺集「さくらばな露にぬれたる色見れば  
なきてわかれし人ぞこひしき」

引たふし  
「訂」原本に「たふし」さあるは誤也。上の九巻に。  
おほきなる木もたふれ。又此の下にもた  
ふれぬべく。又下の十一巻にも。されどた  
ふれず。さあるが如くたふさあるそ正しけ  
れば改めつ

る人々には見え給はねは。いぶせき心ちす。さしつどひ  
て。かの日のさうぞく扇などの事をいひあはするも有。又  
いどみかはして。まろは何か只あらんにまかせてをなど  
いひて。例の君などにくまると。よさうまかづる人もおほか  
り。かゝる事にまかづれば。えとゞめさせ給はず。うへ日  
々にわたりよるもおはします。君たちなどおはすれば。御  
前人すくなくひはねはいとよし。内の御つかひ日々さま  
ある。御前の櫻色はまさらで日などにあたりてしほみわ  
るうなるだに佐しきに。雨の夜ふりたる。つとめていみ  
しうむとく也。いとくおきて。なきてわかれんかほに心  
おどりこそすれといふをきかせ給ひて。けに雨のけはひ  
しつるぞかし。いかならんとておどろかせ給ふに。殿の御  
かたよりさふらひのものども。けすなど来て。あまた花  
のもとにたゞよりによりて。引たふしとりてみそかにい



まだくらからんにされま  
作花に雨かいらば花損して見にくからん  
思召て。人見ぬほどにされし御付られしな  
るべし

いさをかしくて 花のあしくなりしをさら  
させたまふを感ずる心  
いはゞいはなんぞかれすみか事を思ひたるに  
や

後編「山守はいはゞいはなん高砂のをのへ  
の機をりてかきん。是は紫性の哥也。録  
澄の集にもある可動也。此哥の心をおも  
ひて人はさかむるををらんさて引たをり  
ゆくかこの機也  
かれすみか 深無澄にや。信明の息。寛和の  
比の人なり

いかに見るかひなからましき見て  
「目」イ本には「いかにびんなきつたらならま  
しと思ふまもくもいはゞ」あり

あかつきぬす人  
「目」万葉抄には「あかつきに花ぬす人」とあ  
り

きて。まだくらからんにされとこそおほせられつれ。あけ  
過にけり。ふびんなるわきかなとくくとたふしどるに。  
いどをかしくて。いはゞいはなんど。かねずみか事を思ひ  
たるにやとも。よき人ならはいはまほしけれど。かの花ぬ  
すむ人はたれぞ。あしかめりといへば。わらひていとゞに  
けてひきもていぬ。猶どの御心はをかしうおはすかし。  
くきどもにぬれまろかれつきて。いかに見るかひなから  
ましと見て入ぬ。かもんづかさまゐりて。御かうし参りと  
まのりの女官御きよめまゐりはてし。おきさせ給へるに。  
花のなけれは。あなあさまし。かのはなはいづちいける  
と仰せらる。あかつきぬす人ありといふなりつるは。猶枝  
などをすこしをるにやとこそきつれ。たがしつるぞ。見  
つやと仰らる。さも侍す。いまだくらくてよくも見侍らざ  
りつるを。しろみたる物の侍れば。花ををるにやともしろ

めたさに申侍つると申す。さりとともかくはいかでかどらん。  
殿のかくさせ給へるなめりとてわらはせ給へは。いでよ  
も侍らじ。春風のして侍りなんとけいするを。かくいばんと  
てかくすなりけり。ぬすみにはあらでふりにこそふるなり  
の御心  
つれと仰らる。よもめづらしき事ならぬといみしうめでた  
き。殿おはしませは。ぬくたれのあさがほも時ならずや御ら  
んせんと引いらる。おはしませまゝに。かの花うせにける  
は。いかにかくはぬすませしぞ。いざなかりける女房達か  
な。しらざりけるよとどろかせ給へは。されど我よりさ  
きにとこそ思ひて侍るめりつれと忍びやかにいふを。い  
とどくき、つけさせ給ひて。さかもひつる事ぞ世にこと  
人出て見付じ。宰相とそここのはごならんとかしはかり  
つとていみしうわらはせ給ふ。さりけなる物を。少納言は  
前かぜにおほせけると宮の御前にうちあせ給へるめで

いでよも侍らし  
いでよも殿の取かくさせ給ふには侍ら  
し。春風こそ花の徳敷なれば侍つらんこ  
も。やさしき調なるべし  
ふりにこそふるなりつれ  
拾遺二人丸「我がこや雲の中にもおもふ  
らん雨もなみだもふりにこそふれ」調ばか  
りされり  
めづらしき事ならぬぞ  
此后宮の御ありさまのめでたきをほむるは  
めづらしかられど。又此本哥の事をい  
ふ。此言試めづらしかられど。

我よりさきにこそ  
殿下しらざりけるよと仰せらるれども。清  
少見付ぬ已前より殿には御存知ならんと思  
ひし。露のなれをきけば山ふかみ我  
よりさきに春はしりけり。調ばかりをされ  
り。此歌新抄に思見。風雅ニハ深無明  
也

さりげなる物  
いは人の引たふしける物  
をこそ



そらごをおほせ侍  
殿の仰にて櫻のなくなりしを清少知なが  
ら。春風のせしならんといひしはそらご  
を風におほせしと  
今は山田もつくらん  
春風におほせし事の跡時。實之集二山田  
さへ今はつくるなちる花のかこは風に  
ほせざらん  
さばいりいましめつる物を  
くらからんほどに花をされ人に見付られな  
ま仰付し物をさ。昔にまだくらからんに  
されこそ仰られつれ。明道にけり。不似  
なるわざをいひし昔也  
うるせ  
「訂」原本にはうるさくあり。古本并に異本  
にうるせくあるをよしとすべし。源氏傳  
本の巻にもうるせくといふ詞あり  
こわか君  
「増」源氏。こわか君は幼穉の時の尊稱にてた  
れがうへにもいふ。うつぼ物としかげ  
の巻にも。これまきのこをばしめめほど  
はこわか君といへり。又卷十一に。此若君の  
名を松若といへり  
それはいさく見て  
小若君の詞。清少さく見付てさなり  
雨にぬれたりなど。前になきて別ん願に心  
おさり。そすれ清少いひし事  
さて八日九日のほどに  
前に二月朔日の程。二條の宮へいらせ給ふ  
さあり。其二月の八九日比。此一切経供  
養は十日比なれば。后宮の御供の用意に清  
少退出する  
花の心開たりやい

たし。后宮の御白どのにの給ふ詞  
そらごをおほせ侍る也。今は山田もつくるらんと  
うちづんせさせ給へるもいとなまめきをかし。さてもぬ  
たく見付られにける哉。さばかりいましめつる物を。人の  
所にかゝるしれものあるこそどのたまはず。春風はそ  
らにいとをかしようもいふかなとずんせさせ給ふ。たゞこ  
とにばうるせくおもひより侍つかし。けさのささいか  
に侍らましとてわらはせ給ふま。こわか君。されどそれは  
いととく見て。雨にぬれたりなど。おもておせなりといひ  
侍りつと申給へば。いみしうぬたからせ給ふもをかし。さ  
少の見れば  
て八日九日のほどにまかづるを。今すこし近うなしてな  
ご仰らるれど出ぬ。いみしう常よりも長閑にてりたるひ  
るつかた。花の心開けたりや。いかにいふどのたまはせな  
れば。秋はまたしく侍れど。よに此たびなんのほる心ちし  
侍るなど聞えさせつ。出させ給ひし夜。車の次第もなくさ

日の照に付て。しか雨にしほれし花の心も  
開けたるか。古詩の詞なるべし追而可  
考  
秋はまたしく侍れど  
是亦かの花の心開けたりといふ古詩の詞な  
るべし  
車の次第もな  
人々の品によりて乗車の前後次第あるべき  
を女房の急きて我さきにさるまを  
わなひあひて。可然上藤三人と清少と  
おしこりて。押渡也。おしこりなりて。人  
々あはて。乗車する  
かういふに。車の奉行などのを。早是  
ばかりかといふに。まだこにのちで有と  
清少などの答たる  
宮司。中宮大夫以下  
さくせんをのせんとしつる  
得遇三人ありと。禁裏抄云。凡於車管  
乗車女房近代例也。況得遇不可然事也。  
行幸走内侍伺車時之近代事也

づくとこのりさわくがはくければ。可然上藤と清少と三人と。猶  
此車にのるさまのいとさわがしく。祭の歸さなどのやう  
にたふれぬべくまどふいと見らるし。たゞさはれ。のるべ  
き車なくてえまららずは。おのづからさこしめしつて  
たまはせてんなど笑ひ合てたてるまへよりおしこりて  
まどひのり果て出て。かうかといふに。まだこにといら  
ふれば。宮司よりきて。誰々かおはすと問聞て。いとあ  
やしかりける事哉。今は皆のりぬらんとこそ思つれ。こは  
てのりおくれ給ふぞと。下の女房  
などてかくばはくれさせ給へる。今はとくせんをのせん  
としつるに。めづらかなるやなど驚きてよせさせ給へる。清少の  
詞にさば先。宮司の詞  
はまづ其御志ありつらん人をのせ給ひて。つぎにもとい  
ふ聲聞付て。けしからず腹をたなくおはしけりなどいへ  
は。のりぬ。其次には誠にみづしが車にあれば。火もいと  
くらきを笑ひて。二條の宮に参りつきたり。みこしはとく



左京小左近 イ左京小貳右近皆女房の名なるべし

「訂」原本には右京とあれど。こは上にも左京とあれは左京とすべし。イ本にも左京とあり

まわる人ごにみれどなかり  
只今まわる人々を左京小左近などが見れども清少はまわらざるこ  
おるいにしたがひ四人づゝ

一車に女房四人づゝ乗れば。只今下車するに隨ひて。四人づゝまわりつゝふん

「訂」此の十八字。イ本并に万葉抄には「あやしなきか」とあり

いつのまにかうは年比のすまひのさまに  
二條の宮ばかりの御所なるに。いつのまにか年比住調給ひし所のやうにあるぞと感

「訂」此の十八字。イ本并に万葉抄には「あやしなきか」とあり

みづしがいさほしがりて  
御厨子が笑止がりて。おのが車にのせしと。前にみづしが車にあれば火もいさく

又などは心しらすらん物こそつゝまめ  
心しらす物こそ制する事をも遠慮せめ。右衛門などはさやうにみだりに乗車するを制せよかしと仰らるゝ

かたへの人にくしと聞らん  
此右衛門が詞を傍聴の女房達にくまんと清少のきいたるなり。前に清少の后宮の御尋

定めたらんさまのやんごと  
車の前後定法のごとく正しからんこそよからめとなり

くるしきによりて  
「訂」イ本。くるしければ」とあり

申なほす  
「訂」原本。申なすとあり

いらせ給ひて。皆しつらひるさせ給けり。こゝによべと仰

られければ。左京小左近などいふ若き人々。参る人ごに

みれどなかりけり。おるゝにしたがひ四人づゝ御前にま

りつゝとひてさふらふに。いかなるぞと仰られけるもし

「訂」此の十八字。イ本并に万葉抄には「あやしなきか」とあり

は。いつのまにかうは年比の住ひのさまにおはしましつ

きたるにかとをかし。いかなればかう何かと尋ぬばかり

は見えざりつるぞと仰らるゝに。どかくも中さねは。諸共

に乘たる人。いとわりなし。さいはての車に侍人はいか

でかどくは参り侍ん。是もほとくえのるまじく侍つる

を。みづしがいとほしがりてゆづり侍つる也。くらう侍つ

る事こそ佗しう侍つれと笑ふくけいするに。行事する

物のいとあやしき也。又などは心しらすらん物こそつ

まめ。うるもんなどはいへかしなど仰らる。されどいか

でかはしりさき立侍らんなどいふも。かたへの人にくし

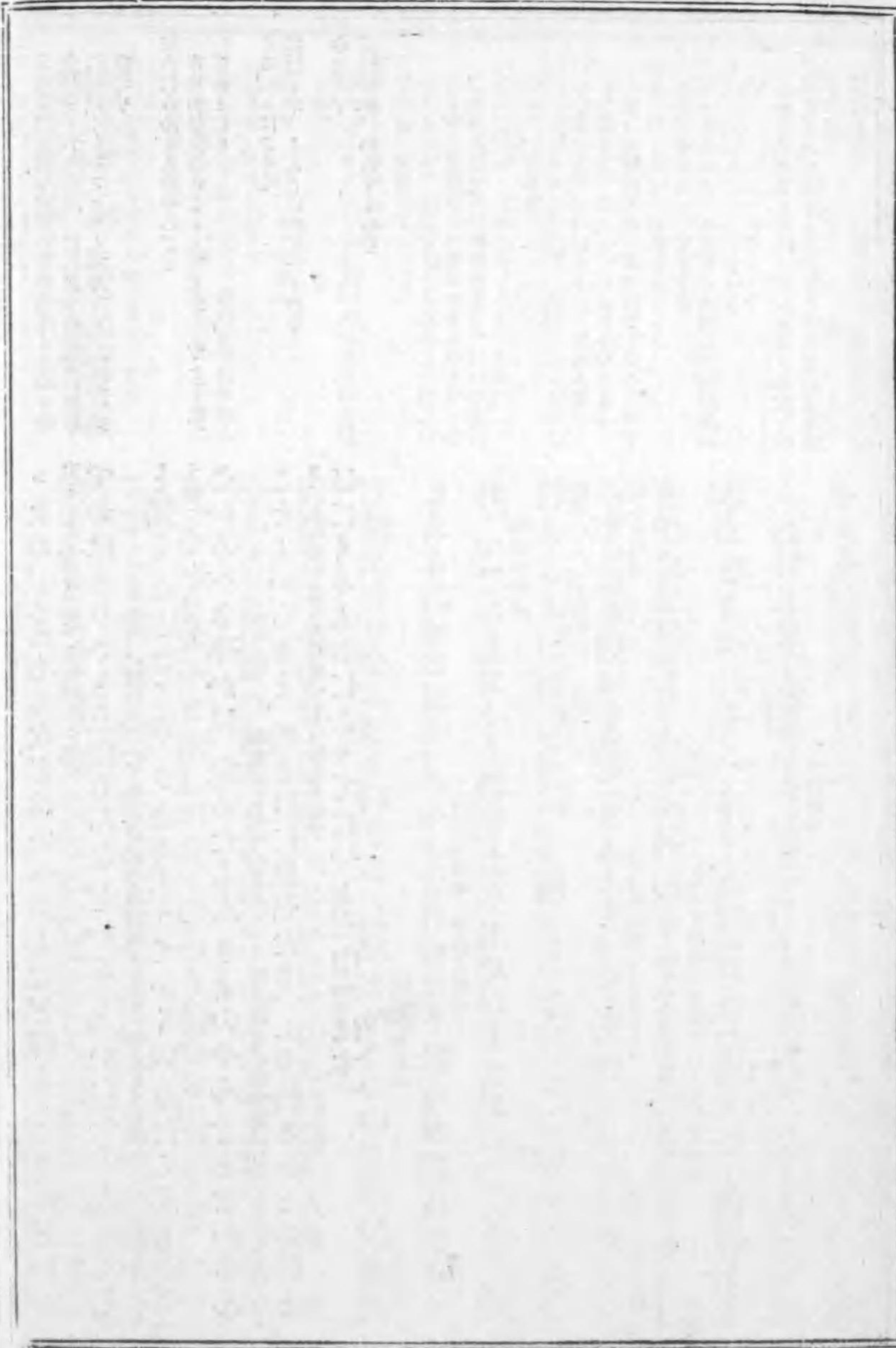
と聞らんとさきこゆ。さまたあしうてかくのりたらんもかし

こかかるべき事は。定めたらんさまのやんごとなからん

こそよからめと。物しげに思召たり。おり侍るほどの待と

ほにくるしきによりてにやとぞ申なほす





御経の事にあす

前の引つゞきなり。后宮御香寺へ渡御あらん祭日の事なり

みなみの院

中關白殿の家也。前にも雨の降におほしき比。雨の降に殿のおほしきと有

裳の腰さし

縫付などするさまなり

かみなどいふ物はあすよりのちばありがたけに。明日を第一の晴と懸をけづりつくろふさまなり

給へかなる

〔訂〕原本には給へるなりとあり。然して原本には本文の如くあり。弘按。上になんの指辭あれば。此所になりとありては語格違へり。故に今活本のかたに改めつ

扇もたせて尋問ゆる人ありつなどつぐ

誰ともなく扇をもたせしめて。清少はこゝにかと尋し人ありしなどい告たるなり

まて。まことにとらの時かときうそき立て

彼女房の早后宮はやがて御堂へ渡御といへば。清少もとく参らんと思へど。まてしはしと思ひ返して。誠に寅の時に御出かと思へば明過たるなり

御経のことにあすわたらせおはしまさんとてこよひまる清少おりのた

りたり。みなみの院の北おもてにさしのぞきたれば。高つ相よるべき同志なり

きどもに火をともして。ふたりみたりよたり。さるべきと女房達なり

ち屏風ひきへだてつるもあり。几帳なかにへだてたるも女房のきぬ間重なり

あり。又さらでもあつまりりて。きぬともとちかさね。裳の化粧なり

腰さしけさうずるさまは。さらにもいはず。かみなどいふ女房達清少に語るなり中宮御渡

物は。あすより後は有がたけにぞ見ゆる。とらのときにな車なり

んわたらせ給へかなる。などか今までまゐり給はざりつ清少に告るなり清少の思案する心なり

る。扇もたせて尋きこゆる人ありつなどつぐ。まて。まこと出たたるさまなり

にとらの時かときうそきたちてあるに。あけ過ぎ日もさし

出ぬ。西の對のからびさしになんさしよせてのるべきと

て。あるかぎりわたどのへゆくほどに。まだうひくしき

ほどなる今まゐりともはいとつ、ましげなるに。西の對



三四のきみ 是も后宮御妹なり。三の君は  
敦道親王の北方なり。四君は一條院の御  
しげ殿と榮花物語に有

みな打むれてだにあらば  
皆一度にのらばまぎれてあらんやと也。  
あまりあらはにて恥かしかりしなほんと  
てなり

おぼゆ  
〔訂〕活本。おぼゆかしとあり  
からうして

〔訂〕活本には。こうして」と有  
車のもとに 伊周と隆家のすだれあげての  
せ給ふ所の事なり  
されどたふれずそまではいきつきぬるこそ  
恥かしさにあゆむ心ちもせず。ころびぬべ

道隆なり  
に殿すませ給へば。宮にもそこにおはしまして。まづ女  
房。車にのせさせ給ふを御覽すとて。みすのうちに宮。し  
げいしや。三四のきみ。殿のうへ。其御をとうとみところた  
立井なり  
ちなみておはします。車の左右に大納言三位中将二所し  
て。すだれうちあげ下すだれひきあげてのせ給ふ。みなう  
ちむれてだにあらば。かくれ所やあらん。四人づゝかきた  
てにしたがひて。それくくとよびたてゝのせられ奉り。あ  
ゆみゆく心ち。いみしう。まことに淺ましう。げそうなり  
なり晴がましき  
ともよのつね。みすのうちにてそらの御目どものなか  
に。宮の御まへの見ぐるしと御覽せんは更に侘しき事か  
ざりなし。身よりあせのあゆれば。つくろひたてたる髪な  
どもあがりやすらんとおぼゆ。からうして過たれば。車の  
もとにいみしうはづかしげにきよげなる御さまどもし  
て。うちゑみて見給ふも現ならず。されどたふれずそこま

かりしをたふれもせで車のもとまでゆきつ  
きしぞうれしかりしとなり  
しちたて  
〔訂〕イ本しちにかけて」とあり  
おほういでいり  
〔訂〕活本には。ゑて」とのみあり

まづ院を 女院なり。東三條院皇子。一條院  
の御母なり  
〔訂〕イ本此の先院のとある上に左の如くあり  
「物いびなどする中に。あきのぶのあそんの  
心ちそらにあふきむねをそらいたり」

御車ごめに十五  
女院の御車といものとの心なり。是女院が  
たの御車の数をいふなり  
よつは尼の車 彼十五の内四は尼若達の車  
となり

〔訂〕原本のもしなし。尼車とあり。今イ本に  
よりて補ひつ  
うすいみのけさころも  
尼もむかしは薄鈍のころも着たるなり  
〔訂〕原本には。けさきめとあり。イ本にけさ  
ころもとあれば。これに從ひて改めつ  
たいの女房の十 彼十五の内なり。第一の  
女院の御車。次に尼車四。次に此女房の車  
十。合て十五なり。是を御車籠に十五とい  
ふなり  
かとりうはき 桃華云。すしにて裏表  
あるきぬをいふなり

ではいきつきぬるこそ。かしこきかほもなきかとおぼゆ  
れど。みなのりはてぬれば。引出で。二條のおほちにしち  
たてゝ。物見ぐるまのやうにてたちならべたるいとをか  
し。人もさ見るらんかしと心ときめさせらる。四位五位六  
位などいみしうおほういでいり。車のもとに來てつくろ  
ひ物いひなどす。先院の御むかへに。殿をはしめ奉りて。  
殿上と地下とみなまらぬ。それわたらせ給ひてのち宮  
は出させ給ふべしとあれば。いと心もとなしと思ふほど  
に。日さしあがりてぞおはします。御車ごめに十五。よつ  
は尼の車。一の御車はからの車なり。それにつゞきて尼の  
くるま。しり口よりすあさうのずゝ。うすゝみのけさころ  
もなどいみしくて。すだれはあけず。下すだれもうすいろ  
のすそすこしこき。つぎにたゞの女房の十。櫻のからきぬ。  
薄紅の雲又たの紅のをも押わたして着たるなり  
うすいろのも。紅をおしわたしかとりのうはぎどもいみ



かすみわたるに。かすみわたれる程に」とあり

しうなまめかし。日はいとうらゝかなれど。そらはあさみ  
どりにかすみわたるに。女房のさうぞくの匂ひあひて。い  
みしきおり物の色々のから衣などよりもなまめか。しう  
をかしき事かぎりなし。關白殿其御つぎの殿ばらおはす  
るかぎり。もてかしづき奉らせ給ふ。いみしうめでたし。  
これら見奉りさわく此車どもの二十立ならべたるも。又  
をかしと見ゆらんかし。いつしか出させ給はゞなどまち

きこえさするに。いかならんと心もとなくおもふに。から  
うしてうねめ八人馬にのせてひき出めり。青すそこのも。

くたい。ひれなどの風に吹やられたるいとをかし。ふせん  
といふうねめは。くすしあげまさかする人なり。えびぞ  
めのおりものゝさしぬきをきたれば。いと心ことなり。し  
げまさは色ゆるされにけりと。山の井の大納言はわらひ  
給ひて。皆のりつゞきてたてるに今ぞ御こし出させ給ふ。

はじめて女院の御ありさまのめでたく見えしにくらふべくもあらずとなり  
めでたしと見え奉りつる御ありさまに是はくらふべか

らざりけり。朝日はななくとさしあがるほどに。木の葉のい  
と花やかにかゝやきて。みこしのかたびらの色つやなどさ  
へぞいみしき。御つなはりて出させ給ふ。御こしの帷子の  
うちゆるきたるほど。まことにかしの毛など人のいふ  
はさらにそらごとならず。扱のちにかみあしからん人もか  
こちつべし。あさましういつくしう。猶いかでかゝる御前  
になれつかふまつらんと我身もかしこうぞおほゆる。御  
こし過させ給ふほど。車のしちども人だまひにかきおろ  
したりつる。又うしどもかけて。みこしのしりにつゞきた  
る心のでたう興ある有さまいふかたなし。おはしまし  
つきたれば。大門のもとにこまもろこしのがくして。獅子  
こま犬をどりまひ。さうの音つゞみのこゑに物もおほえ  
ず。こはいづくの佛の御國などにきにけるにかあらんと。

きこえさするに  
〔訂〕萬歳抄此の次に。龜とひさし」の五字あり。イ本もおなじ  
青末濃紫。裙帶。領巾也。采女の出立なり  
えびそめのおり物のさしぬき  
蒲陶染織物。指貫。采女雙前が出たちなるべし。むかしは女房も馬にのる時はさしぬきを着たるなり。御稔の行幸の時。走馬平絹の指貫着たる事西宮記にあり。又後侍命婦も強袴の上に平絹の指貫を男のこたく着て馬にのりて。御稔行幸に供奉の事等。一條の禪閣の秘訣にあり  
いと心ことなり  
〔訂〕原本には此一句なし。今イ本。活本。万歳抄皆あれば。加へつ

はじめて女院の御ありさまのめでたく見えしにくらふべくもあらずとなり  
めでたしと見え奉りつる御ありさまに是はくらふべか

らざりけり。朝日はななくとさしあがるほどに。木の葉のい

と花やかにかゝやきて。みこしのかたびらの色つやなどさ

へぞいみしき。御つなはりて出させ給ふ。御こしの帷子の

うちゆるきたるほど。まことにかしの毛など人のいふ

はさらにそらごとならず。扱のちにかみあしからん人もか

こちつべし。あさましういつくしう。猶いかでかゝる御前

になれつかふまつらんと我身もかしこうぞおほゆる。御

こし過させ給ふほど。車のしちども人だまひにかきおろ

したりつる。又うしどもかけて。みこしのしりにつゞきた

る心のでたう興ある有さまいふかたなし。おはしまし

つきたれば。大門のもとにこまもろこしのがくして。獅子

こま犬をどりまひ。さうの音つゞみのこゑに物もおほえ

ず。こはいづくの佛の御國などにきにけるにかあらんと。

かしのけなど  
かしの毛立あがるといふもまことなり前  
に有  
〔増〕これも上に髪なども云々であるが如く。見たてまつるに耻かしくも恐多くもある状をいふなり  
きてのちにかみあしからん人も  
髪のたちてなでつけし毛もそいけたれば。悪き髪あらはに見えて。かみあしき人もかこたんとなり  
かしこうぞおほゆる  
〔訂〕原本ぞもじなし。さては語格といのはず。イ本活本に従ひて。補ひつ  
車のしちども  
女房の車ともに牛をやすめて。轡にながえをおろしおきたりつるを。又こしにかけて御供につらならんとするさまなり  
大門のもとに  
〔増〕法興院釋尊寺の大門なり。二條の北東極の東にあり。關白無家公の邸にてありしとぞ  
こまもろこしのがくして  
樂に。高麗の樂。唐の樂とてあり。拾芥に委



あけはり  
〔増〕和名抄に云。鶴。和名阿計波利

のりつる所だに  
さきに乗車せし所さへはれがましかりしに  
となり

色のくろさあかさなり  
あまり暗々しくて髪の色みえわかれぬとな  
り

ほどなるが  
〔訂〕此の次の「いと侘しより以下いふほど」と  
あるまでの三十字は活本になし  
まづしりなるこそは

清少の恥て下乗し作て。先車の尻にのりた  
る人におり給へとゆづるなり  
それもおなじ心や

車の尻の人も清少とおなじく恥たるにやと  
なり  
笑ひて立かへりからうじておりぬればよりお  
はして

大納言殿の笑ひしりぞき給へるが。清少の  
下りたるに又立かへりおはしてとなり  
むねたかなどに見せて

ひきおろして来てまいり  
これ清少后宮の御前ちかくめしよせられて  
上臈の女房と等閑の座めしつはれしはト  
めの事をいへる

〔訂〕原本には。うし給へばさあり。イ本活本  
万載抄の昔と申さあり。故に改めつ  
またいづらの御も申りながら  
御輿の内にては后宮も雲からきぬめしたる  
にや

紅の御ぞよろしからんや  
后宮御輿東に紅をめしたらばよるしかるま  
トくやとめづらしき文林  
地すりの。地すりの。摺輪などのたぐひ  
さうがんとされたる  
泉眼。唐のきめの名也。桃葉御殿。御は  
そき流輪などしたる

〔増〕下臈衆。下臈衆殿。ふたあいの  
さうが。又云ふかみぞりのさうが。なごあ  
り。谷川土清云。うすものい名  
それは殿の大夫の  
御物云。云有長公。これより后宮の出御  
のおそかりし故を御物たり  
院の御供にきて  
女院の供奉にて人に見られし同し下臈をき

空にひゞきのぼるやうにおぼゆ。内門内に入ぬれば。いろいろ

の錦ほしきのあげはりに。みすいとあをくてかけわたし。へい屏鏡なり暮のた

くひなり  
んなどひきたるほど。なべてたゞに此世とおぼえず。御みさ

じきにさしよせられたれば。又此殿ばら。立給ひてとくおりよ  
と伊川公陸家卿のたまふ。のりつる所だにありつるを。今すこしあかう

けそうなるに。大納言殿いと物くしくきよげにて。御し  
たがさねのしりいとなかく所せげにて。すだれうちあげ

て。はやとの給ふ。つくろひそへたるかみも。からぎぬの中  
にてふくだみ。あやしうなりたらん色のくろさあかさ

へ見わかぬべきほどなるが。いと侘しければ。ふともえ  
おりず。まづしりなるこそはなどいふほども。それもおな

じ心尻なる女は伊周に申こはなり。おそれがましとなり。大納言の問なりにや。しりぞかせ給へかたじけなしなどいふ。はち給

ふかなと笑ひて。立かへり。からうじておりぬれば。より  
おはして。むねたかなどに見せてかくしておろせと。宮の

おぼしめすひもなき事  
思ひくまなき事  
さきこえさせ給ひつらんと思ふもかたじ  
けなし。まゐりたれば。はじめおりける人どもの物の見え  
ぬべきはしに。八人はかり出るにけり。一尺と二尺ばかり  
の高さのなけしうへ中宮におはしす。こゝにたちかくし  
て。ゐて参りたりと申給へば。いづらとて几帳のこなたに  
出させ給へり。まだからの御ども奉りながらおはしす

ぞいみしき。紅の御ぞよろしからんや。中中宮からあやの柳  
の御ぞ。えびそめの五重の御ぞあかのまたのせ給はのち衣に。あかいろのからの御ぞ。  
地すりのからのうす物に。さうがんとかさねたる御もなど  
奉りたり。おり物の色。更になべてにるべきやうなし。我

をはいかゞみるとおほせらる。いみしうなん候ひつるな  
ごもことに出てはよのつねにのみこそ。久しうや有つる。  
それは殿のの大夫の院の御供にきて人に見えぬ。おなじ

同にほめんものつれ  
同人行啓の道のほご儀式の事  
清少ゆ  
向后宮の御前之侍られたること  
向后宮の御前之侍られたること



て。又后宮の御供にもまらんは人目ゆるしきて。別に下関を御堂殿の懸させ給へるゆゑそれを待て行啓もおそかりしと云

御ひたひあげさせ給へるさいし

【註】原註に「際次之御願のきはをいふなるべし」とあるは非也

私按。さいしは銀子也。銀子とは婦人儀式のとき前髪にさす具也。後世の櫛の類也

兵衛督忠君  
九條右大臣經輔公男。法興院關白兼家公之同母の弟なれば。道隆公の御をちさいふと云

【註】弘云。忠君は原註には忠尹とあり。又本文にはたゞさいとあれど万壽抄によりて改めつ。大鏡并ニ藤氏系譜ニモ忠君は見ゆれども忠尹は見えず

富小路左大臣。顯忠公也。顯忠公の次男。左衛門佐重輔のむすめ宰相の君也

后宮清少を近くめしよせんと思召せども。宰相かくてあればやうに被仰なるべしと三人いさよく見侍ぬべし

宰相の詞云。中納言と宰相と清少と三人あらん

下がさねながら。宮の御供にあらん。わろしと人思ひなんどて。ことば下がさね。ぬばせ給ひけるほどに。おそきなりけり。御堂殿の好色の事いとすき給へりなど。うちわらはせ給へる。いとあきらかにばれたる所は今すこしけきやかひめてたう。御ひたひあけさせ給へるさいじに。御わけめの御らしのいさゝかよりしてしるく見えさせ給ふなど。さへぞきこえんかたなき。三尺の御きちやうひとよるひをさしちがへて。こなたのへだてにはして。そのうしろにはたゞみ一ひら一枚をながさまにへりをして。なけしの上にしきて。中納言の君といふは。殿の御をちの兵衛のかみたゞきみときこえけるが御むすめ。是も后宮の女房也宰相の君とは富小路の左大臣の御孫。それ二人が上らるて見え給ふ。御覽じわたして。宰相はあなたに。うへ人どものあたる所いきて見よと仰らるるに。心得てこゝに三人いさよく見侍ぬべしと申せば。さば

殿上ゆるさるゝ内舍人

百寮訓要云。是は監殿上などのなる官也。昔は武勇を習はせけるほどに。内舍人をば。坂東國へつはせ給へるほど。今はさやうの事もなし。未だ願せずして。殿上の簡に付はみな内舍人云々。清少は女にて元服せで殿上ゆるされたれば。内舍人と准へ云々ふきかり

【増】源云。今俗にいふ吹簾の吹の儀也

あいなくかしこき御事にかりて給けれとあぢきなくおそれがましき事にかりつらひいひて。おそれおほけれと云

あなかつたけなき事などは又いかゞは主君の召上らるゝに。人のおもはくを障りて。あらおそれかましと辭退申さんは。又いかゞなれば。御意のまゝに參上して。誠に身に過たるありさまも有けん也。是清少の出頭の人。妬むほどに有し事をいふなるべし

陣にちかうまわりけるまゝ、后宮の御機敷の前に。此日近衛司陣をひけるを見たり。其故に陸家陣に有し出立のまゝに弓箭を帯しておはせしなるべしと云をわひて

武官の調度弓服など云。延喜式云。凡大儀は中將武冠。濃緋襖。錦袴。將軍帶。金裝櫛刀。篋着櫛安云々

さらばとて清少を召上るゝとてめしあけさせ給へば。しもにるたる人々殿上ゆるさるゝことばなりとわらばせんとおもへるかといへば。うまゝへのほどぞなどいへば。そこに入らるて見るはいとあもだし。かゝる事などをみづからいふは。ふきがたりにあり。又君の御ためにもかるゝしう。かはかりの人をさへおほしけんなどおのづから物しり世の中もどきなどする人はあいなくかしこき御事にかりてかたじけなけれど。あな辱き事などは又いかゞは。誠に身の程過りさまあらん也。是より又女院などの御機敷の事を云々わたしたるめでたし。殿はまづ院の御さじきにまゐりたまひて。まほし有てこゝにまゐり給へり。大納言二所。三位の中將は陣ちかうまゐりけるまゝにて。てうどをおひて。いとつきゝしうをかしうておはす。殿上人四位五位ことたううちつれて。御供に侍ひなみるたり。入せ給ひて見



今いらいけふはと申給ひそ いらいは以來  
之。今より以來にも。けふはかく窮屈なる  
目見下と申給ひそ。各袈裟衣にて行儀  
正しき故也

【訂】原本にいらへとあるは非之。イ本いらい  
とあるに從ひつ  
又云イ本にけふはと次の次に「人々しめ  
るはと」の八字あり  
此中には后宮こそ主上にておはせと。御  
前に近衛卿を引て禁中のごとくなれば也  
【訂】此なかの主君にはの八字。活本には此し  
ふにはとあり

さらにもし又 清少の絹をかりたらば。若  
又俄にまどふまどからんをこの御たはふれ  
事也

さやうの物をきりしらめ  
清少のきめのやうなる物をきりたらしと  
【訂】或云きりまぬなるべし  
せいそうづのにやあらん  
法服にやらんと給ふきぬは。清少の衣  
の事か。清少納言なれば。姓をよびて  
清少の給ふ。法よくにつきてのたは  
ふれ也

僧綱の中に威儀具足  
僧正。僧正。律師を僧綱といふ也。僧部に  
てまじませば。僧綱のなかに威儀を正して  
こそおはさめと監國に女房の申すたはふれ  
也。此時監國をさなかるべし

紅梅のおり物 染紅うらむらさきと  
大行道導師まわり  
法會のさま也。大行道あり。導師まわりて  
其法事あるさま也

あぐらたてし  
胡床アケラ。腰かくる床机のたぐひ也。  
佛座したるなるべし

奉らせ給ふに。女房あるかぎり。も。からきぬ。みくしけ殿  
まできたまへり。殿の上は。裳のうへに高内侍こうちきをぞき給  
へる。繪にかきたるやうなる御さまども哉。今いらいけふ  
はと申給ひそ。三四の君の御もぬがせ給へ。此なかの主君  
にはおまへこそおはしませ。御さじきのまへにぢんをす  
ゑさせ給へるは。おほろけの事かどてうちなかせ給ふ。け  
にどみる人もなみだらまじきに、あかいろさくら清少のさまの五重  
のからきぬを着たるを御らんじて。法服ひとくだりたら  
ざりつるを。にはかにまどひしつるに。これをこそかり申  
べかりけれ。さらはもし又。さやうの物をきりしらめたる  
にどの給はするに又わらひぬ。大納言殿すこしまどきる  
給へるがき、給ひて。せいそうづのにやあらんと給ふ。  
ひとことよしてをかしからぬ事ぞなきや。僧都の君あか  
色のうす物の御ころも紫のけさ。いとうすき色の御ぞと

も。こしぬきを給ひて。ほさちの御やうにて。女房にせじり  
ありき給ふもいとをかし。僧綱の中に威儀具足してもお  
はしませ。見ぐるしう女房の中になどわらふ。父の大納  
言殿御まへより。松君めて奉る。えび染のかりものよなほ  
し。こそあやのうちたる。紅梅のかり物なごき給へり。例  
の四位五位いとおほかり。御さじきに女房の中松君をにいれ奉  
る。何事のあやまりにかなきのしり給ふさへいとばえ  
ふし。事はじまりて一切經をはすの花のあかき一色にに  
なづに俗にいれて。僧ぞく上達部殿上人地下六位何くれま  
でもて渡るいみしうたふとし。大行道。導師まあり。あか  
うまほしまちてまひなごする。日ぐらし見るに目もたゆ  
くくるしう。内の御つかひに五位の藏人まありたり。御さ  
じきのまへにあぐらたてよるなるなど。けにぞ猶めでた  
き。夜とりつかた式部のせうのりまごまありたり。やがて

【訂】或云きりまぬなるべし  
せいそうづのにやあらん  
法服にやらんと給ふきぬは。清少の衣  
の事か。清少納言なれば。姓をよびて  
清少の給ふ。法よくにつきてのたは  
ふれ也



宮は猶かへりてのち  
后宮のまづ御理禁中へかへりてのち入御あらんこと

た、仰せのまゝとていらせ給ひなごす  
イなんとす。帝の御意にしたがひ給へと殿  
もの給ひて。后宮入御あらんとするこ  
ちかのしほがまなどやう  
女院后宮近くおはしなから御對面なかり  
し心にや「みちのくの千賀のしほがまら  
ながらからきは入にあはぬなりけり」  
[後後]の哥ながら古哥

きよく見え  
世話にすぎ見えぬといへる心なるべし  
あさやかなるきぬの  
経供養の晴の曲たちのまゝなるべし  
となふることもまはれたり いかにかく  
心なきぞ一人いへば。昔同じ心に従者を  
しめる故に。其詞をとなふるこそく従者共  
がいはれたりしこと

夜ざりいらせ給ふべし。御供にさふらへとせんじ侍りつ

とてかへりもまゐらず。宮は猶かへりてのちにどの給は

すれども。又藏人の辨まゐりて殿にも御せうそこあれば

只仰せのまゝとていらせ給ひなごす。院の御さじきより。

ちかのしほがまなどやうの御せうそこ。をかしき物など

もてまゐりかよひたるなどもめでたし。事はて、院かへ

らせ給ふ。院司上達部など此たびはかたへぞい、かふまつ

り給ひける。宮は内へいらせ給ひぬるもしらず。女房のす

さどもは。二條の宮にぞおはしゆとて。そこにみない

さゝりて。まてとて。見えぬほどに。夜いたう更ぬ。内には

どのあものもてきたらんとまつにきよく見えぬ。あさや

かなるきぬの身にもつかぬをきて。さむきまゝに。にくみ

はらたてどかひなし。つとめてきたるを。いかにかく心を

きぞいへば。となふることもしはれたり。又の日雨

り

たふとぎ物

九條しやくぢやう。念佛のゑかう

ふりたるを。殿はこれになんわがすくせば見え侍ぬる。い

かゞ御らんずると聞えさせ給ふ。御心おちることわりな

り

哥は

杉たてる門。神樂哥もをかし。今やうはなぶくてくせつぎ

たる。ふぞくよくうたひたる

今やうは。今様哥とて。儲馬廻歌などのやうに酒宴等にうたふ物也。慈園の御作のいまやううた拾玉集にあり。古今草紙にもいまやう哥さまゝく

見えたり。見えたり。風俗の歌物とてあり。拾芥風俗部云。鳴高又號云大宮。難波の都布良江。玉唾。知々真々。東時。筑波山。甲斐。わね。伊

勢人。常陸哥。荒田。大島。八乙女。我門。是らうたひもの、名なるべし

夏むしのいろ  
桃華葉に。夏のみきすすしの惣名を輝の  
羽色といへり。其たくひにや

むらとせのこま。もえき。夏は二ある。いとあつき比賣虫

御心おちぬ 御心のおちつきたる心也。御  
靈巻に女御も御心おちぬ給と有。  
[訂]さて此の次にイ木左の數句有「されどそ  
のなりめでたしと見奉りし御こといも。  
今の世の御こといもに見奉りくらぶるに。  
すべてひとつに申へきにもあらば。物う  
くておほかりしこといもみなさめつ」  
九條鶴杖 不空三藏の作一卷あり。是にふ  
しはかせを付て。聲明にする事也。鶴杖の  
聲をきけば。一切衆生菩提心をおこし。諸  
佛もこれを持て成佛し給ふ。すべて功德ふ  
かきこそわりのべられし也  
念佛の詞向 光明顯昭十方世界念佛衆生攝取不捨。圓經の詞向の文也。惡心尺云。圓三所作樂二總二向於彼二體之詞向。

哥は 和符歌物等  
杉たてる門 古今「我鹿はみわの山もさ  
しくばさふらひきませ杉たてるかご」發双  
紙に此哥三輪明神云々  
神樂哥 内侍所の御神樂の歌物也。唐傳  
物の哥等あり。藤原家抄に。一條關の  
御註あり  
今やうは 今様哥とて。儲馬廻歌などのやうに酒宴等にうたふ物也。慈園の御作のいまやううた拾玉集にあり。古今草紙にもいまやう哥さまゝく

夏むしのいろ  
桃華葉に。夏のみきすすしの惣名を輝の  
羽色といへり。其たくひにや



【増】後綴に輝を夏虫とよめる歌あり

百三十七段

かうそめ 裏白裏青云々  
男は何色のきぬも  
すべて男の出立は何色も似合さぬ心なるべし。イニ何色のきぬもきたれどあり。何色も着ておれくるしからずと云

百三十八段

ひのさうぞくの紅の單  
日の東を晝の東をいふ心にて。東帯の事。こゝにいふは帯の下に着る紅の一重の事。  
れりいろのきぬもきたれど 顔色のきぬもも勿論きるはきるなれどもとの心也。顔色は赤きなり前にあり  
白うてぞ まさりにこそ  
【訂】此のぞこそは下に結ぶ辭のあるべきを言きたる結なるべし  
活本にはこそなくしてまさりにて結びたり。是は俗にてぞめといふ結にて欧文共に此例あり

百三十九段

さるはかう思ふ人よろづの事にすぐれてもえあら  
詞の文字一つのおんさくもする清少なれども人の上のみ沙汰して。みづからは万事にすぐれもえすとの心也

の色したるも涼しげ也

かりきぬは

かうそめのうすき。白き。ふくこのあか色。松の葉色したる。青葉。さくら。やぶき。又あまき。ふち。男はなにいろのきぬも

ひとへは

白き。ひのさうぞくの紅のひとへ。あこめなどかりそめにきたるはよし。されど猶色きはみたるひとへなどきたるは。いと心づきなし。ねり色のきぬもきたれど。猶ひとへは白うてぞ。男も女も万の事まさりてこそ

わろき物は

詞の文字あやしくつかひたるこそあれ。たゞもじ一つに心得がたくおもふ心也。貴之け高きこ  
あやしくも。あてにも。やいしくもなるは。いかなるにかあらん。さるはかう思ふひとよろづの事にすぐれてもえあ

百四十段

さりとも人をしらす。たゞさうちおぼゆるもいふめり  
人の上はいふさも。我すぐれずしては人の上をよくはしらす只ふささやうに打むもふ放口によめていふならん  
其事させんすといはんといふを  
大事の難儀の事をいふさて。其事をさやうにせんすとも。又はいはんといふにき事な。さ文字をいひおきて。只いはんすといひ。又は里へいでんするなといへば。假てあらぬ事にて成て難きなるべし  
まして文を書てはいふべきにもあらず  
只詞をいひた。へても難きに。まして文を書たがへては。あしとも何ともいふべきにもあらずと云  
なほす定本のまゝ  
物語の悪く書し所を直すも口をなく。定本のまゝいなど書付たるもいざ口をしと云  
【訂】弘云。世にある紙活本に二種あり。その古板は黒川眞頼の紙活本にこれにて大尾となりて。したがされば以下の文なし。少し新らしき活本(元頼の紙)は小中村清延紙活本にあり。是より以下終りま

我がぐれてこそ人の善悪いはいはめ我すぐれずして外の善悪はいかで知らんといふらじかし。いづれをよきあしきとばはしるにかあらん。さりとも人をしらしたるさうちおぼゆるもいふめり。難義の事をいひて。其事させんとす。といはんといふを。と文字をうしなひてたゞいはんする。里へ出んするなといへば。やがていとわろし。まして文をかきてはいふべきにもあらず。物がたりこそあしうかきなどすればいひかひなく。書損したれば作者の本意たがへば  
【訂】此のまゝに書損したりといふにや  
付たるいと口をし。ひてつくるまになどいふ人もあり。此間分明ならず  
もとむといふ事を見んとみないふめり。いとあやしき事を男などはわざとつくつのは。ことさらにいふはあしからず。わがことばはほめてつけていふが心おとりする事也  
【訂】あしき事などを講義の詞にもつけていふはわろしと云  
したがされば  
冬はつよじ。かひねりがさね。すはうかさね。夏はふたあ  
る。しらがさね



百四十一段

あをいろはあかき  
 青色の地紙には赤骨はえあふこいほをい  
 るは蒲黄色にや

あふぎのはねは  
 伊はないろ  
 あをいろはあかき。むらさきはみどり

ひあふぎは  
 伊はないろ

むもん。からる

百四十二段

ひあふぎ 桃華云。繪扇は二十五枚。若草  
 の時は白糸にてまらち。糸のあまりを藤の  
 花をおき物にして。かなめのうへより二三  
 寸持所をのこすべし。東帯の時は夏も繪扇  
 を持也(若草註)。これは一條殿男の繪扇をしるませ給へるおもむきん。女房の繪扇色々あり。さぢもさましく。糸のあまりをあはび縫ひにして  
 花をむすびつけても用ゐ。かなめは蝶鳥など金にてうちて用ゐる  
 むもん 無地の事なるべし

百四十三段

松尾 三代實録十三日。貞観八年十一月廿  
 日。遣三山城國松尾神社。加正一位。延喜式  
 九日。山城國葛野郡松尾神社二座。廿二社  
 次第曰。松尾大山神。市杵島姫神。今社  
 家院曰。第一松尾社。第二月讀社。第三深  
 谷社。第四三宮。第五宗像社。第六大神社。  
 第七衣手社  
 八幡はこの國のみつゞ  
 八王十六代應神天皇にておはします。廿  
 二社次第曰。八幡三所。應神天皇。神功皇  
 后。玉依姫。貞觀元年九月十九日。行教和尙  
 於男山峰二建立。中下畧

神は  
 松の尾。八幡。此國のみかどにておはしましけんこそいと  
 めでたけれ。みゆきなどになぎの花のみこしに奉るなど  
 いとめでたし。大原野。かもは更え。いなり。春日いとめで  
 たく覺えさせ給ふ。さほどのなど云名さへをかし。平野は  
 いたづらなる屋ありしを。こよは何する所ぞとひしか

百四十四段

大原野 玄旨法印云。嘉祥三年に閑院左大  
 臣冬嗣。わが兵神春日を勧請申されたり。  
 猶廿二社次第に委  
 賀茂はさらなり。公事根源云。下鴨は御祖。  
 と賀茂は別當。此御祖の神を玉依姫と申。賀  
 茂建角身命の女也。廿二社本録云。後一條  
 院行幸の時。山城の國を寄進し給ふにより  
 て。今は當國の惣社にてまします也。猶書々  
 にあり

延喜式等前に註。公事根源云。か  
 の社の福宜祝の祝には。和銅年中には。伊奈利山にあらはれ給ひけること。或は弘法大師東寺の門前にて。稻實たる老翁にあひ給ひけるを。  
 東寺の鎮守に勧請申されたる事申説も侍る也。扱いなり。さし稻實を荷ふと書たる事也。猶書に。くはし  
 春日 廿二社次第曰。第一建齋院命(常陸鹿島)。第二齋主命(下總香取)。第三天兒屋根命(河内平岡)。第四姫大神(伊勢大神宮)。若宮入保延日  
 以後遣神殿。下畧。猶書々に委  
 さほどのなどいふ名さ。佐保殿。奈良にあり。淡海公の家。冬嗣の大臣の家と拾芥。一有り  
 平野 延喜式第一日。平野神四座祭。今木。久度神。古關神。相殿比賣神。猶委  
 秋にはあへず。古今「千早振神のいぎには。ふ葛も秋にはあへず。うつるひにけり」貫之  
 みこりの神 三代實録二日。大和國宇陀水分神。吉野水分神。葛木水分神云々

からる。しかる。みはがし  
 崎は

屋は

百四十五段

まる屋 鷹の丸屋等らひきき。鷹の屋を云  
 時そする。特務抄云。奏の時事。上古鷹  
 陰陽寮編類二奏し之。近代指計藏人仰し之。丑  
 杭以後爲三明日分。源氏與入云。亥一魁左近  
 衛夜行。官人初奏。時。終三四廻。下畧。最

時そする。いみしうをか。いみしう寒きに夜なかば







うるさしなごいひ合て  
ねてのいちおきて戸あけん事うるさし武  
部と清少いひ合せて。前につらき人をば  
更によせずさいへる首尾なり

やがてお付て物いふ  
彼兵部清少のちかぬ由を戸たたく男にい  
むとて行ながら。やがて其男と語ふ

三ばしおおもふに

しはらく斗物いふおおもへば更るまで

櫛中将にこそあなれ

戸たたく男をおしはかりて清少の武部に  
いへる詞。櫛中将は前の成信にや

何事をかうはいふぞ

此兵部うちつけに何事を夜更るまでいふぞ  
やと。此中将は清少に心ざしてきたる人  
なるに。心あさき。しわざなればそしる心  
なるべし

例のひさしに

前にをさしきひさしにさいへるゆゑ例の  
ひさしにさいふ

さてぬれて

「訂」イ本「さらで」さあり

なごていふにかあらん

此をの字やすめ字。兵部は何ぞてかやう  
にいふ事ぞ清少のあやしむ詞

ひさしにふたりふしぬるのちに。いみしうたたく人のあ  
るに。うるさしなごいひあはせてねたるやうにてあはは  
猶いみしうかしかましようよぶを。あれおこせ。空ねならん  
と仰られければ。此兵部きておこせと。ねたるごまなれ  
は。更におき給はざりけりといひにいきたるが。やがて  
つきて物いふなり。三ばしおおもふに思ふに夜いたうふけぬ。權  
中將にこそあなれ。こは何事をかうはいふとて。只みそか  
にわらふもいかでかしらん。曉までいひあかしてかへり  
ぬ。此君いとゆしかりけり。さらにおはせん物いばじ。  
何事をさばいひあかすぞなごわらふに。やり戸をあけて  
女はいりぬ。つとめて例のひさしに物いふをさげば。雨の  
いみしうふる日きたる人なんいとあはれなる。日ごろお  
ほつかなうつらき事ありとも。さてぬれてきたらば。うき  
事もみな忘れしとはなごていふにかあらんを。よへき

武部と清少

男の来て戸たたく

肩書の御詞

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

兵部

いみしほそこの  
廊の周などの面白き所にて逢ても雨には備  
興と

見えんと思はん 少は其女に心ざしは  
あるべけれども

人にも語りつがせ  
かやうの雨ふりてわりなき日しも来たりし  
事。女に心ふかく思はせて。人にも語り  
つがせて。名聞がましくする男のしわざに  
やと

「訂」人の心くなればにやあらんさあるを。  
萬歳抄には「人の心くなる物なればにや」  
とあり

もさよりたよりさたのむ本妻をいふ  
人にも語りつがせ

さて日比も見えずおぼつかなくて 彼兵部  
か詞に日比おぼつかなくつらき事有とも  
いひしに答たる詞

人の心くなればにや  
男の心々にてさままのしわざする物なれ  
ばその心。懸雨夜などにくる事を次にい  
はんとて

さるあやしき子細をこころわら  
のふの夜も。それがあなたの夜も。すべて此比はうちしき  
り見ゆる人の。こよひもいみしからん雨にさばらできた  
らんば。一夜もへたてじと思ふなめりとあはれなるべし。  
さて日比も見えず。おほつかなくてすさん人の。かゝる  
をりにもこんをば。さらに又心ざしあるにはえせじとこ  
そおもへ。人の心くなればにやあらん。物見しり思ひし  
りたる女の心ありと見ゆるなどをはかたらひて。あまた  
いく所もあり。もとよりのよすがなどもあはは。まけうし  
もえこぬを。猶さるいみしかりしをりにきたりし事など。  
人にも語りつがせ。身をほめられんと思ふ人の志わざにや。  
それもむけに心ざしなからんにはなまよかばさもつと  
り事までも見えんともおもはん。されど雨のふる時は。た  
ゞむつかしう。げさまでばれどしかりつるそらともお  
ほえず。にくくしていみしほそこの、めでたき所ともお

雨いみしうふるをいふ

雨ふる折にきたりし心ざしある人とおもはん

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ

雨いみしうふるをいふ



こそおほゆれ  
【訂】イ本萬歳抄には此の下に「なかしきことあはれなることなきものを」とあり

月のあかききたらん人はしも十日  
イ本「月のあかきはしも。過にしかな行末まで思ひのこさる事なく。心もあくがれめでたくあはれなる事たぐひなくおほゆれ。それきたらん人は十日二十日あり」  
【訂】此段原本には上行につけてたれど。例の筆すさびにて別段のやうなれば。今改めつ演按。月あかきより別段すべし

とほく物思ひやられ  
朗詠。三五夜中新月色。二千里外古人心。又。離人離外久征戍。何處庭前新別離

この世に傳らぬ物たりと見えたり。是も月夜のおもしろきことをいはんとて

もと見しこまにさ  
大和物語に「夕されば道も見えれど古郷はもとこし駒にまかせてぞゆく」後撰集にもある也。此うたを詠時せしこまにやいさあはれ也

【訂】原本には「さあはれ也とあれど。イ本によりて改めつ  
盈云。かさあはれ也とは。かいさありけん。いさのいの字おちしなるべし

ほえず。ましていとどらぬ家などは。とくふりやみぬかし  
イぞおほゆれ  
とこそおほゆれ」

月のあかききたらん人はしも。十日。廿日。一月。もしは一年にても。まして七八年になりても。思ひ出たらんは  
月夜に我事を男のおもひ出てきたらんはをかしからんぞ  
いみしうをかしとおほえて。えあふまじうわりなき所。人りつゝむべきやうありとも。かならず立ながら物いひてかへし。又とまるべからんをほとめなどしつべし。月のあかきみるはかり。とほくもの思ひやられ。過にし事うかりしもうれしかりしも。をしとおほえしも只今のやうにおほゆるをりやはある。こまの「物たりは何はかりをかしき事もなく。詞もふるめき。見所おほからぬぞ。此事の物がたりにあるにや。しみのましたる語也」  
月にむかしを思出てむしはみたるかはほりどり出て。も  
と見しこまにといひてたてるいとあはれ也。雨は心もどなき物と思ひしみたればにや。かた時ふるもいとにく

ぞある。やんごとなき事。おもしろかるべき事。たふどくめでたかるべき事も。雨だにふれはいふかひなく口をしきに。何か其ぬれてかこちたらんがめでたからん。けにかたの「少將もどきたるおちくほの少將などはをかし。これもよべをど」ひの夜も有しかほこそをかしけれ。足あらひたるぞにくくきたなかりけん。さらでは何か。風などの吹あらしくしき夜きたるはたのもしくてをかしうもありなん。雪こそいとめでたけれ。忘れぬやなどひとりごちて。しのびたる事はさら也。いとさあらぬところも。なほしなどは更にもいはず。かり衣うへのきぬ。藏人のあをいろなどのいとひや。かぬぬれたらんは。いみしうをかしかるべし。ろうごうなりとも雪にだにぬれなははくかるまじ。むかしの藏人はよるなど人のもとなど。たゞあを色をきて雨にぬれてもしほりなどしけるとか。今はひるだ

かたの「少將もどきたるおちくほの少將はも雨の降につけて来たたりし古事をいへる。おちくほの物語四冊有。中納言のむすめあまたあるなかに。わかんどより腹の君見ぬ心ばへすぐれしを繼母にくみてひき、所にすませおちくほの君と名付たり。それを右近の少將といふ人心ざしなかり。雨のふるよかよひそめたり。其比交野の少將といふ人も此君に心かけたれど。早く右近少將の得給へるを。かたの「少將もどきたる」此草紙にはいふにや  
これよべをさひの夜もありしかばこそをかしけれ。あしありひたるぞ  
彼少將雨のふる夜かよひそめて又の日もはしたり。さて三日の夜にあたりし夜。おちくほの君に志有てつかふるあきさいへる女。さまんかくまへて餅飯などを用意して待に。雨いたく降出したれば。少將今夜はえいくまよきしいひやり給へば。女君「世にふるをうき身とおもふわが袖のぬれはしめける宵の雨哉」といひおこせしに少將れんと作て。彼あきさいにかよふ帯刀を云男一人を具して。雨にぬれくちにておわしたり。帯刀。曹子にてまづ水も御足すまき彼物置りにあり。これを此草紙によべをさひの夜も有しかばこそをかしけれとけるにや。又足洗ひたるがきたなき故も彼物がたりに委し見て了管あるべし



あけたてば文の見えぬ  
夜明れば文もてきし物の。けさは文も見え  
ればさびしきこ。古今「あけたてば輝の  
なりはへ鳴きくらしよるは燈のもえこそ明  
せ」さよめる詞

水ます雨の 古今「まこもるよの河本  
雨ふればつれよりこにまさる我こひ」此  
うたを尋せる詞にや猶可考

あしたはさしもあらず  
曇るべくも見えざりし心

色紙のむすべたる

「訂」本むすびたるさあり。さてはよく解さ  
れたり。然れども此のむすべのべはばれの  
約言にもや。さらば本のまゝにても開ゆべ  
し

ひきわたしけるすみ  
封下目の墨なるべし。墨ひく内に筆の水た  
るさま。珍しく面白き文跡にや  
こま／＼さくほみ 紙のたゝまれてくほみ  
し

くだりせばに 行の間せばく細かに書しこ  
うらうへかきみだり  
うらおもてに書みだしたるこ

うちほいみむ所はゆかしけれど  
文みるく少笑ひたるは何事書し所ぞぞか  
たばらよりゆかしき心  
さなめりとおぼゆる  
その事とおしはかる心。それなりけり  
さいふにおな

青色なまきり。緑彩ミトノヤマト  
にきざめり。只ろうさうをのみうちかつきためれ。あふな  
衛のたぐひ之職人の衛府を兼いイイかりし物を。雨にくる人は日比のつらま  
どのきたるはましていとをかしかりし物を。かく聞て雨  
も忘るさ兵部が詞をきいては  
にありかぬ人やばあらんずらん。月のいとあかき夜。紅の  
紙のいみしうあかき。たゞあらずとも書たるを。ひさし  
にさしいれたるを。月にあてて見しこそをかしかりしか。  
月に見る興なごはあらとこ

雨ふらんをりばさはありなんや

是より別段

つねに文おこする人の何かはいまはいふかひなし。い  
は文をもやらとこ

まはなごいひて。又の日おともせねは。さすがにあげたて  
は文の見えぬこそさうさうしけれと思ひて。さてもきは

ふしかりける心かななごいひてくらしつ。又の日雨い  
たうふる。ひるまで音もせねは。むけに思ひたえにけりな  
ごいひて。はしのかたにるたる夕ぐれに。笠さしたるわら  
はのもてきたるを。つねよりもとくあけてみれば。水ます  
雨のどある。いとあはくよみ出しつるうたごもよりはを

あしたはさしもあらず  
曇るべくも見えざりし心

見出すほどもなくしろくつもりて。猶いみしうふるに。随  
身だちてはうやか。びびしきをのこの。からかさとして。  
そほのかたなる家のとより入て。文をさしいれたるこそを  
かしけれ。いとしろきみちのくにがみ。しろき色紙のむす  
べたる。うへにひきわたしけるすみのふと氷りにければ。  
すそうすになりたるを。あげたれはいとほそくまきて。む  
すびたるまきめはこま／＼とくほみたるに。すみのいと  
くろううすく。くだりせばに。うらうへかきみだりたるを。  
うちかへし久しう見ること。何事ならんど。よそにて見や  
りたるもをかしけれ。まいてうちほいむ所はいとゆか  
しけれど。とほうるたるはくろき文字などはかりぞ。さな  
めりとおぼゆるかし。ひたひがみながやかに。おもやうよ







こゝ人の来て居ておこす。心もなき外人の火桶の消がたる故に。めたさ炭をつみかされなごしたるが。火桶の内きれいならぬをにくめるにや其心次の圓に見ゆ  
中に火を云々  
「訂」遺云。此所の傍註に原本灰はさあり。こは炭はの誤云

れいならず御かうしまわらせて。常は雪の物見に格子を上るにけふは寒氣ゆゑ御格子おろさせたる云

かうろほうの。香爐は雪面白き所なれば。くの給ふ云。此圓后宮なるべし。但基殿の悦目抄には一條院の勅旨あり

みす高くまきあげ。則詠愛寺鐘歌。檀園。香爐基盤。白樂天の詩云

此宮の人には。時の入清少をほめて此后宮の御方にては可然人といふ云

「増」傍註云。夫などの清少をほめて。此宮の御方にさふらふ人なれば。さるふることをも知べき事といふ云。註は少かたがひて聞ゆ

陰陽師のもさなる。これより又別段云

るこそいみしううれしけれ。物などいひて火のきゆらん  
もしらざるたるに。こと人の来て。すみいれておこすこそ  
いとにくけれ。されどめらりにおきて中よ火をあらせ  
たるはよし。みな火を外さまにかきやりてすみをかさね  
おきたるいたゞきに火どもおきたるかいとむつかし  
雪いとたかく降たるを。れいならず御格子まらせてす  
びつに火おこしてもの語などしてあつまりさふらふに。  
少納言よかうろほうの雪はいかならんと仰られければ。  
みかうしあけさせて。みす高くまきあげたれば。わらばせ  
給ふ。人々も皆さる事はしり哥などにさへうたへと思ひ  
こそよらさりつれ。猶此宮の人にはさるべきなめりとい  
ふ  
陰陽師のもさなる。わらばせこそ。いみしく物はしり  
たれ。祓などしに出たれば。さいもんなどよむ事人はなほ

しろき水いかけさせよ。歌して物のけなごの絶入たる時。面に冷水  
かそいけさもいはぬに彼輩の物なれ心得て  
立走りて其事あり云。いかけは。沃瀧也。源氏横柱巻に火取なさいかけさある  
たぐひなるべし。さらん人もがな  
さらん人もがな。さやうならん従者がな  
「訂」人もは原本人を作る。古抄本にはも  
あり  
弘按。なさいまきまきもトなれば  
りしならん。今改めつ  
物いみしにさて  
深くつゝしむべき物忌には常の居所を去て  
外にうつる事ある云  
葉ひろう見えて  
爾雅云。楊。蒲柳也。詩經疏云。蒲柳之水二  
種。一種皮正青。一種皮紅正白葉皆長廣。似  
柳可爲二箭。廣志曰。楊一名高皮。木葉二  
於柳也  
さかしらに柳の  
さかしらは賢だてなる心云。風流なるべき  
柳のなまどひに賢立て。此楊の葉廣より  
くげなるは春の面伏さ云。柳の眉といふ  
り面と云は縁語云  
いさいつれんまきり  
前につれくなる物。所さりたる物忌さあ

のみならず利口なるさいはんさて云  
こそぎけ。そとばしりて。しろき水いかけさせよともいは  
ぬよ。しありくさまの。れいしり。いさかまうに物いは  
せぬこそうらやましけれ。さらん人もがな。つかはんこと  
そおほゆれ  
「訂」人もは原本人を作る。古抄本にはも  
あり  
弘按。なさいまきまきもトなれば  
りしならん。今改めつ  
物いみしにさて  
深くつゝしむべき物忌には常の居所を去て  
外にうつる事ある云  
葉ひろう見えて  
爾雅云。楊。蒲柳也。詩經疏云。蒲柳之水二  
種。一種皮正青。一種皮紅正白葉皆長廣。似  
柳可爲二箭。廣志曰。楊一名高皮。木葉二  
於柳也  
さかしらに柳の  
さかしらは賢だてなる心云。風流なるべき  
柳のなまどひに賢立て。此楊の葉廣より  
くげなるは春の面伏さ云。柳の眉といふ  
り面と云は縁語云  
いさいつれんまきり  
前につれくなる物。所さりたる物忌さあ



いかにして過にし

此后宮の御歌。千載集の調書云。一條院御時  
皇太后宮に。清少納言始めて侍ける比。三月斗  
に三日まかり出侍けるに。彼宮よりつ  
はされて侍ける事あり。此始て侍けるさ  
ふに心を付べし。二三日清少の侍らぬま  
さびしきに。其已前は伺さしてくらせしぞ  
と云

けふしもちこそ  
後拾遺ニ「くるいまはちこそを過す心ちし  
てまつばまことに久しかりけり」  
けいせん事は覺えぬこそ  
我返歌を奉らん事は覺えぬこそ。我なが  
ら聴したれその心

清少のさびしきは。住所からと斗思ひ侍て。  
后宮の御つれんくをしらで里居し侍し事。  
その心也。こくまぬるべき心をふくめたる  
歌也。此返歌も千載集に入

こよひのほども少將にや  
百夜かよへさいひし女もさへ。九十九夜  
ゆきて。今一夜を待あへずしてうせたりし  
深草の少將の世がたりにていへる詞にや。  
清少も早く参たき心いられに。さ夜一夜を  
待つれてうせやし侍らんさなるべし  
くらしかれけるこそ。清少を待かれて后宮  
のくらしかれ給ふさいへるやうなるな。あ  
まりうけたりたる事さたはふれの給也

「訂」弘云。此所のこそ指辭。結びの辭なし。  
いかにくはいかにくはの歌にや  
まことにさる事や。實にさやうの遠慮も思ひわ  
かざりしと例のふくめたる詞也  
「訂」事や原本には事にも作れり。さてはいと解  
しかたき結尾の詠法也。誤字にやあらんと思ひしに  
イ本には事やあり。こはよの意のやにて事  
の義也。かくあらんにはよく解し得らるべければ。  
今改めつ

女房

さみいどをかしくかき給へり

后宮の御つれんく。清少のまらさりに  
いかにして過にし。あどをすらしけんくらしわづろふき  
てふさあり  
のふけふかな

どなん。わたくしにばけふしもちとせの心ちするを。曉だ  
てすも早く参れさ。宰相のせうそ。斗にても  
にどくとあり。此君のの給はんだにをかしかるべきを。ま  
して仰せことこのさまにはおろかならぬこしちすれど。け  
いせん事とはおほえぬこそ

雲のうへにくらしかねける春の日をどこからともな  
がめつる哉

宰相への返事にはさ  
わたくしには。こよひのほども少將にやなり侍らんずら  
んどて。あかつきにまらりたれば。さのふの返し。くらし  
かねけるこそいとにくし。いみしうそしりきとおほせら  
る。いと佞しう誠にさる事や

清水に 元真集に「清水の山郡公開つれば  
我古解の壁にかはらむ」

山ちかき入相 朗詠。おほ寺の入相の鐘の  
聲ごまにさよみしに少かへたる上句也。ま  
て此哥は清水なれば山近きと。鐘の聲々  
に付ても我が清少を戀る思ひの歌は思ひし  
るらんを。つれなくも久しき長居歌と昔に  
ふくめ給へる餘意を次の詞にあはしてか  
きつてけ給へるさま  
こよなの 無題と書ん。これにます事なき  
心也  
はちすの花びら 散花の花びらなるべし  
まわらす

「訂」是もまわらすとあるべき所なるをかくあ  
るは異格なれど。こは重結の格と見るべし。  
かやうの所も此書には三四の所あり  
そやの御導師聞て  
初夜のおこないすみて願衆の退出は夜半も  
過る比ならん。江次第十一。御佛名のこ  
ころに云。初夜の御導師某大法師自云。二  
刻三守一詞

たるひのいみじしだり  
垂氷軒のつらいたれさかりし  
「増」しだりは和名也。既云。雪は屋簷前  
雨流下也。管音。和名阿万之大利あり

是も后宮より御せうそありし物なり  
清水にこもりたるころ。ひららしのいみじうなくをあは  
れどきくは。わざと御使しての給はせたりし。からのかみ  
のあかみたるに

山ちかき入あひのかねのころとにこふるころのか  
ずはしるらん

野よりこよなをみつけて心得へし  
ものをこよなのながるやとかよせ給へる。紙などのなめ  
けならぬもとり忘れたるたびにて。むらさきなるはちす  
の花びらにかきてまわらす

十二月二十四日。宮の御佛名のそやの御導師聞て出る人  
は夜なかも過ぬらんかし。里へも出。もしは忍びたる所へ  
も夜のほど出るにもあれ。あひのりたる道の程こそをか  
しけれ。日ごろ降つる雪のけさはやみて風などのいたう  
吹つれば。たるひのいみじうしだり。つちなどこそむら  
くくろきなれ。屋のうへはたどかしなべてしるきに。あ







家ひろくきよげにて  
是は前段に宮づかへ人里亭に泊あつまる事  
いひし次手にさやうの黒子のよきか持て。  
宮づかへ人をあひすみかたらひて有度事な  
いふなり

又むつましうくる人もあるは 彼みやづか  
へ人のしたしき人の見まふには「  
まねらん折は 彼宮仕へ人の主君の御つた  
へまゐる時は」  
其事見れて思んさまにし 主君へまゐる  
用意の物など見あつひて思ふやうにした  
てやらまほしきぞ  
よき人のおはします御ありさまなど 彼宮  
仕人の内さわりにて。貴人の御さまの御  
かしこきまほしき心ないふ

あくび よくうつる物  
ちごども なまなき物はよく物を見習ふ  
故。孟母の三たび隣をうつし、事などおも  
ふべし  
なまけしからぬえ物 身はいやしきなが  
ら。貴人のまねをこのむものないふ  
「訂」イ本此の次に。あしと人にいはる、人。  
さるはよしとせられたるよりはうらなくぞ  
みゆる」の三十二空あり

○増訂枕草紙春曙抄卷之十二

家ひろくきよげにて。鶴屋一門の八さ相住はいふにおよばずと友なふ人にせ  
んにはさ  
ひなどする人には。宮づかへ人かたつかたにすゑてこそ  
あらまほしけれ。さるべき折はひと所にあつまりて物  
がたりし、人のよみたる哥何くれどかたりあはせ。人の文  
などもてくる。もろともに見。返事かき。又むつましうく  
る人もあるは。座席をうまへてきよげにうちしつらひていれ。雨などふり  
てえ歸らぬもをかしようもてなし。句まゐらん折は其事見入  
て。思はんさまにしていだしたてなごせはや。句よき人のお  
はします御ありさまなどいとゆかしきぞ。我ながらいふことけしからぬ心  
にやあらん」

見ならひする物

あくび。ちごども。なまけしからぬえせもの」  
うちとくまじきもの



さるはよしとしられたるよりは さやうの  
悪き者は。世にまき入といふ人よりはうら  
なく見えて。内心たのもしげなしと云

あしと人にいはるゝ人。さるはよしとしられたるよりは  
うらなくぞ見ゆる」

舟のみち。日のうらゝかなるに。海のおもてのいみしうの  
どかに。 昔海のまま遠縁のきわのうらたたるをのべたるやうと云

えて。いざゝかおそろしきけしきもなきわかき女の。 瀬

めばかりきたる。侍ひのものゝ若やかなるもろともは。

ろといふ物おして。哥をいみしううたひたるいとをかし

うやんごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに。 是より

いたうふき。海のおもてのたゞあれにあしうなるに。物も

おほへず。とまるべき所にこぎつくるほど。舟に波のかけ

たるさまなどは。さばかりなごかりつる海とも見えずか

し。おもへは舟にのりてありく人はかりゆゝしきものこ

そなけれ。よろしきふかさにてだに。 いさる

りてこぎゆくべき物にぞあらぬや。ましてそこひもしら

なごかりつる 和の字也。なごやうにゆる  
やうなりし海上のめらく成しさま  
よろしきふかさ  
大かたなる深さにてと云  
さまはかなき  
機杼のはかき心也。舟の事云

やがたさいふ物にぞ  
経庫。和名云舟上屋也。釋名云。舟上屋  
之屋。言舟上屋也。  
増。所蔵に經庫。和名布衣夜加太さあり  
はやをつけて  
早緒也。舟の櫓に付る繩をいふなり  
たえなば何にかはならん  
もし早緒されたらば何とせん。海にちち  
入なん云  
もかうのすきかけ  
帆額透影。イもかうのすかけ。帆額のすだれ  
かけたる云。此本可用敷  
されどひさしうおもげに  
我舟はかの水ぎは一尺ばかりに足りたる  
舟さひさしうおもくはららす云

ず。 千尋云ちひろなごもあらんに。物いとつみいれたれば。水ぎ  
は、只一尺ばかりだになきに。けすごものいさゝかおそ  
ろしごも思ひたらず。はしりありき。 清少なごの心よりいふ云露あらくもせはしづ  
みやせんと思ふに。 大なる松の木などの二三尺ばかりに  
てまろなるを五六はうくゝとなけ入などすることそいみ  
しけれ。 貴人は屋形におはす云やかたといふに物ぞおはす。されどおくなるはい  
さゝかたのもし。はしにたてる物ごもこそめくるゝ心ち  
すれ。ばやをつけてのどかにすけたる物の上わけとよ。 早緒をつけたるくわんの事云た  
えなは何にかはならん。ふとちちいりなんを。 句 其たのむはやをそれだにい  
みしうふごくなどもあらず。 清少なごの舟はやがたありて履などかけし云我のりたるはぎよけに。もか  
うのすきかけ。 イすかけつもごかうしあけなどして。されどひとし  
うおもげになどもあらねは。 ちひまき家のやう云たゝいへのちひまきにてあ  
り。 他の舟云ことふね見やるこそいみしけれ。とほきはまことほさ  
ゝのはぎつくりてうちちらしたるやうにぞいとよく似



はし舟

〔増〕和名抄唐韻云。艇。漢語抄云。艇。乎夫。稱。波之布。小舟也。釋名云。二人所乘也。

弘云。今俗にはしけ舟といふ。

あまのしらなみは  
期詠一世の中を何にたさへん朝ぼらけこき  
ゆく舟の跡のしらなみ。拾遺集にも如此な  
るに。万葉集には。こきいにし舟の跡なき  
がこまと有

あまのつづきしたる

和名云。泉耶。漁人。海人。潜女云々。あ  
まの水の中に入らずなぞりするをいづきとい  
ふ。

こしにつきたる物

いかにし盤の腰に綱をつけて引あげしこ  
此たくなはを海にうけ

古今「思ひきやひなの別におさるへてあま  
のなはたさいきりせん」とは「宗祇云。盤の  
なはたさいはたぐる心云。飛鳥井家御説に榜  
の字云」

「難波江や盤のたくなはたき能て盤にしめる  
五月雨の比」後鳥羽院

うしろへたく

〔増〕弘云。こはうしろめたくと同音云。キツ  
カヒといふ意云。べきめとは往來言にて同  
義云。其例は天皇をいふらみこみこすべ  
らみこみこさいひ。女殿花を。をみなべし。  
をみなめし。さいふも皆同ト

取まごひくりいる

盤のあがり相門に其門をひけば。男の心  
にたぐり入るこま

はなつたるいきなど  
二條院の讀本のうた  
「わたつ海の沖つはあひにうづく盤の息も  
つぎあへす物をこそおもへ」  
めもあやに。目もさくらわけて流ましと云。  
總角巻に思ひよらの事めらわやに。盤  
云。おどろるる云々

右衛門の尉。誰ぞ不知  
えせおやもたりて

たさひ心かたましく。形たばなりさも。骨  
肉の親を海に入る五逆罪の悪人なれば。見  
ると見る人にくみ謀む事をして後人の  
いましめさせしにや

七月十五日。ぼんを奉る

孟蘭盆經云。以三白味飲食。安孟蘭盆中。應三  
十方百億億云々。公孫根源云。孟蘭盆は梵  
語也。倒懸救苦と翻す。倒懸はさかさま  
にかくる也。餓飢の苦しみを思ふに。さか  
さまにかげられたらんがことし。救苦は此  
餓飢の苦しみをさかさまに思ふ。佛弟子自強  
始て六道を得て其母の在否を見るに。餓飢  
の中にあらしが。期月尊にまうて。此  
苦しみをさかさまに思ふ。七月十  
五日に自恣の僧を供養せば。解脱を得ん。説給ひしよし。孟蘭盆經に見えたり上下界  
道命あじやり。作者部類云。右大將道綱男。天王寺の別當云々。後撰より開花千載等すべて十代の集の作者なり  
わたつうみに親を。このおとし。此入といふ詞を子たる物のこいふ心にそへられし。此昔は五逆の悪人ながら。うら盆に惡念をひるがへして  
普門寺。所未考。此昔盆の字音を以て。人を水に落す音にいひよせて哥せり。此うた讀詞花集にいれり

小野殿の母上。是右近大將道綱の母云。道  
綱をのどのといひしにや

普門寺。所未考

又の日小野殿に。拾遺集此うたの詞書にも

○増訂枕草紙卷抄卷之十二

たる。とまりたる所にて。舟ごとく火ともしたるをかしう

見ゆ。はし舟とつけていみしうちひさきにのりてこそあ

りく。つどめてなどいとおはれ也。あまのしらなみは誠朝のけしきより思ひよせたりに

こそさえてゆけ。よろしき人はのりてありくまじき事

とこそ猶おほほゆれ。かち路も又いとおそろし。されどそれ

はいかにもくつちにつきたればいとたのもしと思ふ

に。あまのかづきしたるはうきわさなり。こしにづきたる

物たえなはいかゞせんとなん。をのこだにせば。さてもあ

りぬべきき。女はおほろけの心ならじ。男はのりてうたな

どうたひて。此たぐなはを海にうけありていとあやふく

うしろへたくはあらぬにや。蟹ものほらんとては其なは

をなんひく。取まごひくりいる。さまごことわりなるや。

盤のあがりためいきするさま

舟のばたをさへてはなちたるいきなどこそ。まごこと

たゞ見る人だにしはたるに。おとし入てたゞよひあり

くをのこは。めもらやにあさよし。更に人の思ひかくべ

きわきにもあらぬことにはこそあめれ

右衛門のせうなるもの。えせおやをもたりて。人の見る

におもておせなど見ざるしう思ひけるが。いよのくによ

りのほるとて。海におとしいれてけるを。人の心うがりあ

さましがりけるほどに。七月十五日。ぼんを奉るとていそ

ろを見給ひて。道命あじやり。

わたつうみにかやをかしてこのぬしのぼんする見る

ぞあはれなりける

とよみ給ひけるこそいとほしけれ

道命の心に感下たる詞云

拾遺集などにある事の物がたり

又小野どの、母うへこそば。普門寺といふ所に八講しけ

法華八講云

普門寺。所未考

又の日小野殿に。拾遺集此うたの詞書にも

○増訂枕草紙卷抄卷之十二

三百九十九



小野にまかりてと有  
たきこる事は

上旬はきのふの八講の講品拾新設の食の  
事。尺貫者國王にておはせし時法法の御  
意深くて。阿蘇仙人につかへて千年のほど  
餅をこり水をくみつ。後に法華經を得給へ  
る事。下旬は王實。山中に禪して。仙人  
の基をうつを見て。辨の朝の務たる事。昔  
の心はけふの遊ひの面白きに。をのゝえ柄  
るまでもありたき心。このうた拾遺集に  
は下旬いさなのゝえはこゝにくたきんこ  
あり。梓に小町を添て云々

こゝもさばうちき。此もさば人のうた  
ども書たれば。開書のやうになりたる事。  
うちき。さば其頃の昔を集めおくと。いふ  
由。微書記物語に見えたり。朝垣打聞とい  
ふ書物もあるにや

樂平が母の宮の。伊豆内親王の御事。古  
今雜上云。なりひらの朝臣母の。長岡に  
住侍ける時に。樂平宮つへすて。時々  
もえまかりさふらはす侍ければ。しはすは  
かりに。母のみこのもさより。さみの事と  
て文をもてまうてきたり。あけて見れば。  
詞はなくてありける。昔「おぬればさらぬ別  
もありさといへば。獨見まくほしき君哉」伊勢  
物語にはさらぬわかれのさあり  
よみにもよむかし  
昔を只詞にうちよめば。その外に昔のさまお  
さる物なるべし  
ものをば

増「源按」ものをばのなほ。いかによみか  
て物よの意。ばは助辭にていさがるし。  
下文にもあり

るをきよて。又の日小野殿に人々あつまりてあそびしふ  
みつくりけるに。  
道綱母のうた  
たきこる事はきのふにつきにしをけふはきのゝえこ  
くにくださん  
柄せんこ

よみ給ひけんこそめでたけれ。こゝもさばうちきゝに  
なりぬるなめり

又業平が母の宮のいよく見まくとの給へるいみしう  
あはれにをか。引あけて見たりけんこそ思ひやらるれ  
をかしと思ひし哥などを。さうしにわかきておきたるに。け  
すのうちうたうたひたるこそ心うけれ。よみにもよむかし  
よろしき男をけす女などのほめて。いみしうなつかしう  
こそおはすれ。などいへば。やがて思ひおとされぬべし。  
そしらるゝは中くよし。けすにほめらるゝは女だにわ  
ろし。又ほむるまゝいひひそこなひつる物をば

伊周公云。后宮中におはする頃伊周より給へるにや  
大納言殿まあり給ひて。ふみの事などそうし給ふに。例の  
夜いたうふけぬれば。御前なる人々二人づううせて。御  
屏風きちやうのうしろなどにみなかくれふしぬれば。た  
つひとりになりてねふたきを念じてさふらふに。うしよ  
つとそうする也。あけ侍ぬなりと獨ごつに。大納言殿今さ  
らにおほどのごもりおはしますよとて。ぬべき物にもお  
ほしたらぬを。うたて何しにさ申つらんと思へども。又人  
のあらばこそはまぎれもせめ。うへのおまへのはしらに  
よりかよりてすこしねふらせ給へるを。かれ見奉り給へ  
せ給ふ。ゆになど宮のおまへにもわらひ申させ給ふもし  
らせ給はぬほどに。をさめがわらはの庭鳥をとらへても  
ちてあす里へいかなといひてかくしかきたりけるが。い  
かゞしけん犬の見付ておひければ。らうのさきにけい

ふみの事そうし  
御學文の物がたりにて。いつも夜ふくるが  
こゝもふけし  
二人つううせて。御學問の事か。いにも  
らすれふたくして女房のすべり出てるる  
あけ侍ぬ  
清少の夜明しと云。帝のれふらせ給ふ故。  
もはや大納言殿もれ給へしと思ひて申す  
なるべし  
今さらにおほこのごもりおはしますよ  
一條院れふらせ給ふを伊周公がめ被申  
す。すてに夜明るに。今迄おきおはしまし  
て今更に御殿なるべき事はさ

をさめがわらはの  
長女也。前にあり。それが子などの意



聲めい玉のねふり

朗詠云。鶴人嘯唱聲。司王之院。これ清翹  
策の文なれどもうたひ物なれば詩といへる  
にや。鶴人とは清翹の官人。前に五四つ  
を奏する。有是すなはち鶴人の嘯唱也。  
庭の鳥の帝の御殿をおどる。よし折に。よ  
くつなへる朗詠なるべし。

又の日はよるのおとせにいらせ 其あくる  
日のよるは。后宮帝の御殿所にいらせ給敬。  
清少退出する。

人よべば 清少退出せんさて従者をよぶこ  
さしぬきのなかり  
指貫のすそ半分ほどふみく。これしん  
たふるな 清少にころぶなと

ゆうし宿のこりの月に  
朗詠の部に。佳入靈夢。長長。魂を續助。  
遊子。獨行。三。於。残。月。一。宿。谷。鶴。鳴。これ。真。鳥。の。曉  
の賦の句。

きて。おそろしうなきのしるに。皆人おきなどしぬや。う  
へもうちおどろかせおはしませて。いかにありつるぞと  
尋させ給ふに。大納言殿の。聲めい玉のねふりをおどろか  
すといふ詩を。たかう打出し給へるめでたうをかしきに  
清少は。つりおきぬしゆふ。  
ひどりねふたかりつる目もおほきはきになりぬ。いみじき折  
るうえいなれば。  
の事かなど宮も興せさせ給ふ。猶かゝる事こそめでたけ  
れ。又の日はよるのおとせにいらせ給ひぬ。夜中はかりに  
らうに出て人よべば。伊周の詞。清少退出する事。  
清少の雲。つらきわ。  
もからかきぬば屏風にうちかけていくに。月のいみじう  
あかくて。なほしのいとしろう見ゆるに。さしぬきのなか  
らふみくよまれて。袖をひかへてたふるなどいひてゐて  
おはするまゝに。伊周の時。  
お給へる。又いみじうめでたし。清少のめづるを伊周笑たまふ。  
てわらひたまへど。いかでか。猶いとをかしき物をば。  
おもしろさものをいひて。おどろかす事。

僧都の君の御めのとのまゝと。僧都は。僧の  
乳母の名。いひしん。とも。清少  
も。御殿の御局に在した。其乳母の名を  
まゝいひしにや。源氏の誕生の宮の乳母  
も。まゝいひしにや。

「増」或院云。まゝはすべて乳母の通稱なるべ  
し。  
みくしげどの。  
「町」万機抄には。此の次に「まゝ」はまゝに  
めその」の十字あり

かうなのやうに  
寄居虫。ちひさき貝の中に。つゞりすむ虫也。  
長明方丈記に。かうなちひさき貝を。このむ  
さいへる是也。此男家を。遺失して。人の家な  
かり。仕事をいふ。

みまぐさなもやす  
此哥の彼御休つみたる所より。いふなうけ  
て也。夜殿を。証野に。添ていふ。心は。明  
「や」すも。草は。もえ。なん。春。日。野。を。只。春。の。日  
に。ま。か。せ。たら。なん。是。ら。の。う。た。の。心。より。よ  
めるにや  
わらひのしり 乳母のまゝにや

僧都の君の御めのとのまゝと。みくしげどの。みつほね  
に。あ。る。男。の。い。ふ。ま。お。な。な。  
に。あ。れ。ば。を。の。こ。あ。る。板。じ。ま。の。も。と。ち。か。く。よ。り。ま。て。か  
ら。い。目。を。見。さ。ふ。ら。ひ。つ。る。誰。に。か。は。う。れ。へ。申。さ。ふ。ら。ば。ん  
と。て。なん。と。な。き。ぬ。は。かり。の。け。し。ぎ。に。て。い。ふ。何。事。ぞ。と。と  
へ。は。あ。か。ら。さ。ま。に。物。へ。ま。かり。たり。し。ま。に。を。た。な。く。侍。る  
所。の。や。け。侍。り。に。しか。ば。日。こ。ろ。は。が。う。な。の。や。う。に。人。の家  
に。ま。り。を。さ。し。い。れ。て。なん。と。さ。ふ。ら。ふ。う。ま。づ。か。さ。の。み。ま。ぐ  
さ。つ。み。て。侍。ける。家。より。なん。出。ま。う。で。來。て。侍。る。也。只。垣。を  
出。火。の。所。に。此。男。の家。ち。つ。り。し。ん。夜。殿。に。れ。こ。る。を。云。こ  
へ。だ。て。侍。れ。ば。よ。ど。の。に。ね。て。侍。ける。わ。ら。ば。ま。も。は。ま  
く。や。け。侍。ぬ。べ。く。なん。い。さ。か。もの。も。と。う。で。侍。ら。ず。な  
ご。い。ひ。を。る。み。く。し。げ。どの。も。聞。給。て。い。み。し。う。わ。ら。ひ。給。ふ。  
清少のうた。  
みまぐさなもやすはかりの春のひによどのさへなどの  
こらざるらん  
どかきて是をどらせ給へどてなげやれば。わらひのし



このおはする人の家のやけたりとて  
こにおはする女房の其方の家やきたり  
哀みて是をさらせらるゝと  
かためもあきつかうまつりては  
此男筆なる事はいふ。片目もあては  
いかでかよみ侍らん

里にいきていかにほらたいん  
彼男里に歸り行きて人に見せ聞ていかにほ  
らだん

なごかく物ぐるほしからん  
いっでやうに物狂はしくわらふらん又  
笑ふをわらはせ給ふ  
いみしくおもへども  
男のみさを親への孝など随分と思へども

内にもいられず  
外にはなち出されてちかくいれられ  
之。桐葉巻に。なごなに成給ひてのうは。  
ありしやうに御座の内にもいれ給はずあ  
る類なるべし  
まらうごにもいさなかし  
客人をもよくあしらふ。イまらうごも。  
こは容をあへしらふ所。此本しむるへ  
き。

りて。此おはする人の。家のやけたりとていとほしがりて  
給めるとてとらせられは。何の御九んじやくにか侍らん。  
合力の物何ほにて侍らん  
物いくらはかりにかといへは。まづよめかしといふ。いか  
でか。かためもあきつかうまつらではといへは。人にも見  
せよ。只いせめせは。とみにてうへへまあるぞ。さはり  
めでたき物をえては。何をか思ふとて皆わらひまごひて  
のほりぬれば。人に見せつらん。里にいきて。いかにほ  
らだんなど。御前にまありてまのけいすれば。又わら  
ひさわら。御前にも。なごかくものなるほしからんとわら  
ばせ給ふ

男はめあやなくなりて。おやひとり有いみしくおもへど  
も。わづらはしき北の方の出来てのちは。内にも入られず。  
さうぞくなどの事はめのと。又こうへの人どもなどして  
せよ。西東のたいのはごにせうとにいせきかしう。

屏風さうじのあも見所ありてすまひたり。殿上のさうじら  
ひのほど口をしからず人々もおもひたり。うへにも御け  
しきよくて。つねにめしつ。御あそびなどのかたきには  
おほしめしたるに。猶つねに物なげかしう。世の中心にあ  
はぬこちして。すきくしき心ぞかたはなるまである  
べき。上達部の又なきにてもかしづかれたるいもうとひ  
どりあるはかりにぞ。思ふ事をもうちかたらひならさめ  
所なりける

定登僧都にうちきなし。すいせひ君にあこめなしといひ  
けん人もこそをかしけれ  
まことや下野にくだるといひける人。  
おもひだにかうらぬ山のさせも草たれかいとまのま  
はつげしぞ

上達部の又なきに  
此男のいもうと。ある上達部の隠々なるに  
かしづかれて北方なりし

此調前の詞に連続せず。義も通下がたし落  
丁などあるにや。諸本かくのごとし。道て  
可レ別。先前は別段なりん

「訂」弘按。此定登云々一段は。イ本に上の四  
段のこことくなるものと云段の末に入  
り。是をよしすべし。然れども又なほ誤字  
もあるにやと思へば今本のまにさし置つ  
まことや下野にくだるといひける。清少  
下野國へ下るといふ説あるは誠か問人に  
誤遺す。イ高野とあるは。かきあやまりに  
や。イまことやがて下る云々

「訂」弘按。此一段も誤あるべし。高麗抄には。  
下のおふさかはの歌の次に。まことや云々  
と此一段を添へたり。然して下野にの三字  
なくてやがてはの四字あり  
おもひだにかうらぬ。此清少の哥。上句は下野へ下る事思ひもかけぬとの備。下句は誰いひてまやうには告たるぞと。里はを。左とほこそ  
へたり。清少納言集に「こいながらほとふるたにもある物ない」とほとのさなきかせ」とよめる詞とおなす。さし草は灸治に用ふる故火



にそへて。思ひだにかいらぬといへり。伊吹は美濃近江の堺なるにはあらず。下野國なりと能因が坤元儀に出たるよし種中抄に見ゆ。此哥も難  
かいふさいひかけて。下野の伊吹の里さしも草ある所なれば。よせてよめるにや。かくさだにえやはいぶきのさしも草同秀句云

おなご宮人をかたらふ  
彼女房とおなご禁裏后宮などの宮仕への女  
房に。遠江守の子が二心なりし  
親などもかけて

是よりかある女房の友達にかたる詞云。  
彼男の二心を恨ければ。さる事なしとあら  
がひて。父の遠江守をも誓言にいれたりし  
こと  
いかいふべきさいふを聞て  
かやうに男はあちがふをいかいはんま彼  
女房の云  
ちかへきみとほつあふみの 清少々の女房  
にかはりてよめる哥云。上句は親をかけて  
誓ける事かうけて。遠江守を神にそへてよ  
めり。下句は夢にだに見すさいひしをうけ  
て。無下に一向端つたなをも見ざりしが。神  
かけてちかへき。遠江の名所なれば。端さいひかけてよめり。神かけても橋の縁語云

ある女房の遠江守の子なる人をかたらひてあるが。おな  
ご宮人をかたらふとさよて恨みければ。親などもかけて  
ちかへせ給ふ。いみしきそらごと也。夢にだに見すとなん  
いふ。いかいふべきさいふを聞て  
ちかへきみとほつあふみの かみかけてむけにはまなの  
はし見ざりきや

びんなき所にて人に物をいひけるに。むねのいみしうは  
しりける。などかくはあるといひけるいらへに。  
清少哥  
あふさかばむねのみつねにはしりるのみつくる人やあ  
らんどおもへは

女のうはぎは  
うす色。えびぞめ。もえぎ。さくら。紅梅。すべてうすいろ

百四十九段

「訂」原本には此段なし。然して原本は此邊誤  
り多きやうなれば。今添く万葉抄によりて  
改めつ

むれのいみしうはしり  
なまこの胸さわぎし。古今一人にあはん  
つきのなきよは思ひおきてむねはしり火に  
心やけをり  
あふさかばむねのみ 逢坂を逢にそへて。  
走井の水を見付るさいひ懸たり。逢時は見  
付る人やあらんさ常に胸さわぐこと  
女のうはぎは

のたふひ  
からぎぬは  
あかいろ。ふぢ。夏はふたある。秋はかれ野  
もは  
おほうみ。しびら

「増」愛之。女官装束の時上に着るもの云  
おほうみ 源氏玉がづらに。海賦のおり物  
とあり。大海に海松貝也。此類の雲なるべし  
しびら 夕顔巻に。しびらたつ物かこも斗ひさかけとあり。うはぎの事云々。種中抄にて雲の「やうと見えたり

かきみは  
おりものは  
春はつらじ。櫻。夏は青くちは。朽葉  
紫。しろき。もえぎにかしはおりたる。こうはいもよけれ  
ども。猶見ざりこよなし

もは  
「増」愛之。女官装束の時上に着るもの云  
おほうみ 源氏玉がづらに。海賦のおり物  
とあり。大海に海松貝也。此類の雲なるべし  
しびら 夕顔巻に。しびらたつ物かこも斗ひさかけとあり。うはぎの事云々。種中抄にて雲の「やうと見えたり

あふひ。かたはみ  
夏うすもの。かたつかたのゆだけきたるひとこそにくけ

百五十二段

かきみ 汗衫。童女の装束之前ニ註  
夏は青くちは 桃華の御説。表背丹の黒み  
あり。裏は青

あふひ。かたはみ  
夏うすもの。かたつかたのゆだけきたるひとこそにくけ

百五十三段

もえぎにかしはおりたる  
萌木に柏葉をうは敷にむりつけたる云  
見さめこよなし ことなく見ざりたる云

あふひ。かたはみ  
夏うすもの。かたつかたのゆだけきたるひとこそにくけ

百五十四段

あふひ 葵也  
かたはみ 酢漿。和名にあり。イニ通下にあ  
られちとあり  
「訂」萬葉抄にも。かたはみの次にあられちと  
あり  
かたつかたのゆだけきたる

あふひ。かたはみ  
夏うすもの。かたつかたのゆだけきたるひとこそにくけ



此以下の文意聊心得がたし。若し中古此時代に襲の衣服などに片方の行長ゆたかにたち着る事ありしにや。論語云。襲裘長短右袂。これはははごころもながらつたつたの例にてはあらんかし。

「訂」万歳抄此所の「夏すものつたつたの云々」の註云。暑氣の比肩をぬく云々。上古はまからざりしかども。中古にはあまた重れた時は片肩ぬくも。

まててきるべき物には  
かた／＼ゆたかなるさ又よのつれなるさを  
突へてきるべきにあらんか。

左右のゆたけ  
「増」ゆきの長きをいふ云。万歳抄云。脱たれず左右のゆきそろひたるをいふ云。つたつたおもしろあらん。長き方へひかれておもしろん。

「訂」原本かたばかまざり。今イ本によりて改めつ。

訂正にて。イ彈正弱にて。職員令云。彈正弱一人掌。彈正弱外。彈正弱。延喜式云。凡京申弱以下毎月巡警。彈正弱。東西市井諸寺非違。及客館。路橋破損之類也云々。彈正はたすつて。諸法度違背の望をたす官なれば。人愛すくなき物なり。形よき君達には似あはずとの心なるべし。

宮の中將。勳物云。源頼定。一品式部卿爲平親王二男。母左大臣高明公女。長徳四年十月廿二日任。右中將。元彈正大弱。公卿補任云。正曆三年八月廿八日彈正大弱。式部卿の宮の御子なれば宮中將といふなるべし。むれものいけ。胸痛と靈氣と云。イ本むれ

れど。あまたかさねきたればひかれてきにくし。わたなどあつきはむねなごもきれていと見らるし。まててきるべき物にあらず。猶むかしよりさまよくきたることよけれ。左右のゆたけなるはよし。それも猶女はうのさうぞくにてはどころせかめり。まてこのあまたかさねるも。かたつかたかもくぞあらんかし。きよらなるさうぞくのおり物。うすものなど。いまはみなごころあめれ。いまやうに又さまよき人のきたまはんいとびんなき物ぞかし。かたちよき君達の彈正にておはするいと見らるし。宮の中將などの口をしかりしかを。

やまひは  
むね。物のけ。あしのけ。たゞそこはかどなく物くばぬ。十八九はかりの人のかみいどうるはしくてたけばかりすそふさやかなるが。いとよくこえていみしう色しろ。かは

のけとばり有て物のけとばなし

事ならびにさふ  
何の事なげに問ふ。古今一村鳥の立にし。名今更に事なしふさもまるしあらめや。一註。二村鳥さおきはさわざ立心云。名のあまねくなる儀にや。されば事なしといふさもまるしあらトの心云々。此心にて了簡すべし。

あいきやうづぎよしと見ゆるが。はをいみしくやみまどひて。ひたひがみもまどになきぬらし。かみのみだれかゝるもしらす。おもてあかくておさへるたるこそをかしけれ。

是よりむれやむ人のさま云  
八月はかりしつろきひとへ。なよらかなるはかまよきほどにて。しをんのきぬのいとあきやかなるを引かけて。むねいみしうやめは。友だちの女房たちなどかはるくさつ。

い。いとほしきわさかな。例もかくやなやみ給ふなど事なしびにさふ人もあり。心かけたる人はまこといみしどおもひなげき。人しれぬ中などは。まして人め思ひてさしよるにも。

よるにもちかくもえよらずおもひなげきたるこそをかしけれ。

是より物のけなやむ人のさま云  
いどうるはしくながきかみを引ゆひて。物つくとしておきあがりたるけしきもいと心ふるしくらうたけなり。うへ







くればしをのぼりこら  
備階。長谷にあり。前にも出たり。登園の  
ぼりつかれたる心  
[増]上の六巻の末にも初瀬詣の儀ありてそこ  
にもくればしを昇降するにおそろしきさま  
あり。見合すべし。上には此所よりも委し  
くあり

よるしき人はせいしわづらひぬかし  
やごなきをいふまでにはあらぬ清少はご  
の人はかの下すごもの前に有さても制しが  
たしと  
てこそす  
是下也。其方違少しのけさ宿坊のいふほど  
こそまはしほのけと

ついでのまにに  
次第をたがへずこの心

けしきこそなまげに心づきな心なまげに心づきな心。京よりはるく思ひ立てさうでし心  
いみしき心をおこしてさう  
でたるに。川の音などのおそろしきに。くればしをのぼり  
こうじていつしか佛の御かほををがみ奉らんとつはねに  
いそぎ入たるに。みの虫のやうなるもの。あやしききぬ  
きたるか。いとにくきたちるぬかづきたるは。おしたふし  
つべきことちこそすれ。いとやんでとなき人のつはねは  
かりこそまへばらひあれ。よるしき人はせいしわづらひ  
ぬかし。たのもし人の師をよびていはすれば。そこどもす  
こしされなどいふほどにこそあれ。あゆみ出ぬればおな  
にないがしるなること  
心やうになりぬ  
いひにくきもの  
人のせうそこ仰せ事などのおはかるき。ついでのまにに  
はごめよりおくまでいとひにくし。返事又申にくし。  
はづかしき人の物おこせたるかへりこと。かどなになり

思はずなる事聞付  
成長の子のよからぬすき事するを聞つけて  
まへにては 直前には親の鼻見をいひに  
くしと  
四位五位は冬六位は夏 四位は黒。五位は  
緋の袍。冬に相應なること。六位は緑彩夏  
に似合しきこと  
このわすかなども  
禁甲に直宿する程の衣服も。男女につけて  
其品々こそ吟味あらまほしけれこと  
一家の主にても其品々の衣服の吟味ありた  
きか。誰かはさまで吟味し定るぞこと  
それに物見知たる  
一家の内にてだに。其衣服の品の吟味なき  
は他所の使者などの物見知たるは。さかく  
批判し沙汰すべきこと  
ましてまらひする人は  
一家の内にてだにあるに。ましておほやけ  
のまらひする人の衣服の吟味なきは。こま  
なく口をしこと  
れこのつらにおりたるやうにて  
此詞行文なるべし。或本に此詞の下に前に  
たのもしき物といふ所にある「人のかほに  
さりわきてよしと見ゆる所はせいふより。  
まもらるいこそ危しけれ」といふまで六七  
行かけり。亦行文なるべし  
[増]弘按。こはいとをかきなごいふ詞を省け  
る。意は猫の地におりたるは其品なくて  
見すばらしきものなれど。四位五位の人に  
ても。衣服の粗なるは品格なくて。猫の地

たる子の思はずなる事きよつけたる。まへにてはいとい  
ひにくし  
是亦別段  
四位五位は冬。六位は夏。どのゐすがたなども。しなこそ  
男も女もあらまほしき事なめれ。家の君にてあるにも。誰  
かはよしあしをさだむる。それだに物見知たる使ひ人ゆ  
きて。かのづからいふべかめり。ましてまらひする人は  
いとこよなし。ねこのつちにありたるやうにて。たくみの  
物くふこそいとあやしけれ。新殿をたて。東のたいたち  
たる屋をつくるとて。たくみどもゐなみて物くふを。東お  
もてに outcomes 見れば。まづもてくるやかうきと。しる物と  
りてみなのみて。かはらけはついでつ。つぎにあはせ  
ふものうつは物たりにもしもの御あはせあり。猫の腹はくはめかと思へばやがて皆くひて  
をみなくひつれば。おものはふようなめりで見るといふに。  
やがてこそうせにしか。二三人ゐたりしものみなさせしか  
は。たくみのさるなめりと思ふや。あなもたいなこと  
無物味  
番匠は皆さやうならんこと  
世にさいさい  
汁物之江次第に  
東の對めきたる屋之  
此詞前後についでや行文にや



におりたるが如くをかしなるべし

もや

物がたりをもせよ。むかし物がたりもせよ。其のたりにする人ならぬ人のむかしよりまきはすさかしらに

らへうちして。こと人どものいひまぎらばす人いとにくし

し

ある所に中の君とかやいひける人のもとに。君達にはあ

らねども。其心いたくすきたるものいばれ。心はせなご

ある人の。九月はかりにいきて。有明の月のいみしうてり

ておもしろきに。名残おもひ出られんことのはをつく

していへるに。今はいぬらんと遠く見おくるほどに。えも

いはずえんなるほど也。出るやうに見せてたちかへり。た

てしごみあいたる陰のかたにそひ立て。猶ゆきやらぬさ

まもいひしらせんと思ふに。有明の月のありつゝもどう

ちいひてさしのぞきたるかみのかしらにもよりこす。五

寸ばかりさがりて。火ともしたるやうなる月のひかり。も

中の君さや

大君中君三君の類か。あれど三女ごの中の心。イ何の君は名のしれぬゆゑにいふなるべし

君達にはあられど

君達には攝家などの御子息をいふ。さやうの歴々の御子なられど

猶ゆきやらぬさま

名残を思ふ故。猶行やらぬ心ばへをも女にいひしらせん男の思ふにこそ

有明の月のありつゝも

拾遺三「月月の有明の月の有つゝも君しきまさは我れめやも」

かしらにもよりこす五寸ばかりさがりてさしのぞきたるかみのかしらにもよりこす。五寸ばかりななまでさしたるさま也。イホ

てあつたつにおもふにもよほされてその心よほされて。おどろかさるゝ心もしければ。やさらたちいでにけりどこそかたりしか

女房のまありまかでするにば。車をかざるをりもあるに。心よそひしたるかはけうちひてかしたるに。うしかひわ

らばの例のうしよりもしもさまにうちひて。いたうはしりうつも。あなうたてとおほゆかし。そのこともなどの

物むつかしけなるけしきにて。いかでよふけぬさまにおひてかへりなんといふは。なほ主の心おしはかられて。と

みの事なりと又いひふれんともおほえず。なりとほのあそんの車のみや。夜なかあかつきわかず人ののるに。いさ

よかざる事なかりけん。よくぞをしへならはせたりしか。道にあひたりける女車のふかき所におとしいてえひ

きあけでうしかひのばらだちければ。我が従者してうたせさへしければ。まして心のままにいましめおきたるに

さしのぞきたるかしこより。五寸ばかりをさりて。火ともしたるやうなるさあり尤可

用か。まわりまわつて。登上し退出する。心よそひしたるに。かりに給はらんご用意せしごゆげにいひ

て車をかしこせし。例のうしよりも下さまに。牛をいたくいひ

くたしくめるさまに。かりたる車の車副の男

のこともなどの。猶主の心おしはかられ

猶の字心をつくべし。心よそひたるなど心

よげにはいひおこせたりとも猶不請なりし

ならんご其主の心しられたりご。さみの事なりと又いひふれんともおほえず

急用にも又さ車かる事いはんご思はずさ

なりさほのあそん。氏姓不知。但高階樂遊にや。縁緒より七代

の孫。敏思の子。ならはせたりし。【町】は職に註にありて。かの意の

いへれど。上にその指辭ありては。階格といひ難し。按ずるにその上にこの字の落たるなるべし

我が従者してうたせ。樂遊の従者にいひつけて。彼の女車の牛を打追せて引あけさせたるご。心よき人なるべし



こまなしびにまかせてなごはあらす  
何のいふべき事もなきにまかせてつこ  
くにはあらで。心とめてかくこ

しるきひさへのいたくしほふたるを  
物をおもひつゝ花なごうちまもるさま  
[増]演接。女のもよみ衣をかきて來たりし  
をかへすならんか

久しくながめて  
物をおもひりたるさまなり

經のさるべき所々  
奇妙

見えたり」  
好宮にて本妻をさだめぬ男の物たりん  
すきくしくて獨ずみする人の。よるはいづらにありつ  
らん。曉にかへりて。やがておきたる。まだねふたけなる  
けしきなれど。すゞりどりよせすみこまやかにおしすり  
て。ことなしびにまかせてなごのあらす。心とめてかく  
まひるけすがたをかしく見ゆ。まろききぬごものうへに  
山吹くれなるなどをぞきたる。まろきひごへのいたくま  
ほみたるをうちまもりつゝかきたて。前なる人にもど  
らせず。わざとだちてこねりわらはのつきづきまきを  
身ちかくよびよせて。うちさよめきていぬるのちも久し  
くながめて。經のさるべき所々なごまのびやかに口すさ  
びにまらたり。おくのかたに御てうづかゆなごしてそよ  
のかせば。あゆみ入て。ふづくるにおしかりて文をぞみ  
る。おもしろかりける所々はうちずんしたるもいとをか

なほしばかりうちきて  
直衣には下にきぬをかきぬる。きぬをか  
されざる直衣ばかりさいふにや。一説指  
貫を略して直衣ばかりきたる。源氏帶  
木にて初の觀を用ふ  
けしきはめば。彼の小舎人かへりたるさま  
を口にはいひもやらでこぼつくりなごして  
其けしきを見する

なほしうへのきぬもかりきぬも  
直衣に  
ても抱にても狩衣にても心こ。かされて  
替るにはあらす

目をそらにて  
供の男たて文をさりもちて。馬上の主に捧  
るさま。主を見るそて目を空にする  
いとくげなからぬが  
[訂]万葉抄には「いさきよげなるが」とあり。  
然れども本のまゝにてく問ゆべし

せんとゆだらに  
前に註す。こゝは靈風の  
新にむと見ゆ。則千手陀羅尼經の中に。若  
家内に大惡報にあひ。百怪談ひ起り。鬼神  
邪鬼其家を騒亂するにも。千原大徳の像の  
前に其壇を設けて。至心に觀世音菩薩を念  
ふ此陀羅尼を誦して。其千遍に滿たば惡業  
悉消滅せんさあり

し。手あらひてなほしはかりうちきて。るくをぞそらによ  
む。まこといどたふとさほごに。ちかき所なるべし。あ  
りつる使うちけしきはめば。ふとよみさして。返事に心入  
るこそいとほしけれ」  
是より別  
きよけなるわかき人の。なほしもうへのきぬもかりきぬ  
もいとよくて。きぬがちに袖うちあつく見えたるが。馬に  
のりていくまゝに。ともなるをのこたて文を目をそらに  
てとりたるこそをかしけれ」  
是より別  
前の木だちたかう庭ひろき家の。東南のかうしごもあけ  
わたしたれば。涼しげにすきて見ゆるに。もやに四尺の几  
帳立て前にわらうだをおきて三十餘はかりの僧のいと  
にくけならぬが。うすずみの衣。うす物のけさなごいとあ  
さやかにうちさうそきて。かうぞめの扇うちつかひ。せん  
じゆだらによみるたり。ものよけにいたうなやむ人にや。



ほそくにひやうなること  
細くつやめきたる御結をよりましにもたせ  
て  
なを目うちひききて  
なをいば聲をいらいげたるさま。目うちひ  
さきは目うちひつさきて之。尻目ににらみ  
見るさま。決し曾と詩にも作り  
「訂」万歳抄に目をふさぎてこそあり。ひさふ  
さ相違すればさもありぬべし  
又一本には此句なくてうちながみてあり  
おこなふまにしたがひ給へる護法も  
彼僧の加持しおこなふにしたがひて佛體を  
見せ給へる心。護法は加持の體をいふ。こ  
前にも有。イニおこなふにしたがひて調ぞ  
ちる。佛の御心ばへを見るにもいさたふさ  
し云々  
「訂」万歳抄。又一本には護法もげに四字な  
くて「はさげの御心もいささあり  
例の心ならはいかにはづかしさまはん  
よりましの童女現心ならば人々あつまりし  
中にては。此ありさまはぢまごんご  
みづからはくるしからゆ事さしりながら  
加持によりましの調ぞられ苦しむは。靈の  
苦むにて其よりましの童女のみづからの上  
ならずさは知りながらさ

よりまし  
うつすべき人としておほきやかなるわらはの。かみなどう  
るはしき。すしのひとへあきやかなるはかまながくき  
なしてゐさり出で。よこさまにたてたる三尺の几帳のま  
へにゐたれば。とさまにひねりむきて。いとほそくにほや  
かなるとこそとらせて。をよと目うちひさきてよむだら  
にもいとたふとし。けそくの女房あまたるて。つごひまも  
らへたり。久まくもあらでふるひ出ぬれば。もとの心う  
よりまし  
しなひて。おこなふまに記きたがひ給へる護法もけにた  
ふとし。せうどのうちさきたる。ほそ冠者ともなどのうし  
ろにゐて。うちばするも有。みなたふとがりてあつまりた  
るも例の心ならはいかにはづかしとまごはん。みづから  
はくるしからぬ事とまりながら。いみしうわびなけきた  
るさまの心ぐるしさを。つご人のしり人などば。らうたく  
おほえて。几ちやうのもとちかくるて。きぬひきつくるひ

わがき人々はのちとなし  
おほいへご心もとなし。急きして見  
るさま。降臨などの若き女房  
さちやうのうちにとこ  
帳内と思ひしにややうに人々の中を過まし  
く思  
かみをふりかけて  
おしてをばちて。ひたひ懸にておほひかく  
したる  
ぢすこして  
加持。加は佛の三密也。持は行者の三業行  
三密を此三業に持たるを云  
時のほごにもなり侍ぬべければ  
例時のおこなひすべきほごになりしこと  
ほうちばふたう 赤考茶飯などないへる同  
にや  
「訂」一本には。此の「ほうちばうたうまむら  
せん」の十二字なし。なきをよしとすべし  
「増」岩崎美隆云。ほうちばほそくの調。然  
らば熱瓜也。谷川十清云。ほふたうの小豆  
を以て飯粒を煮るものこいへり。播磨亮  
云。ばうぞうとは今の雑煮餅のこと。茶難

イマカ  
なごするほごに。よろしとて御ゆなど北おもてにどりつ  
ふほごをも。わかき人々は心もとなし。ほんも引さけなが  
らいそいでくるや。ひとへなごきよけに。うすいろのもな  
ごなへかよりてはあらずいときよけ也。さるの時をぞい  
みしうことわりいばせなごしてゆるしつ。さちやうのう  
ちにとこそ思ひつれ。あさましうもいでにける哉。いかな  
本心うしなひつるほごにいかありけんこと  
る事有つらんとばづかしがりて。かみをふりかけてすべ  
り入ぬれば。まはしととめて。かちすこしきて。いかにさば  
やかに成り給へりやとてうちをみるも恥かしけや。さ  
いごさふらふべき。時のほごにもなり侍ぬべければと  
いごさふらふべき。まはし「ほうちばうたうまむらせん」を  
ごごむるを。いみしういそけは。所につけたる上らふと  
おほしき人。すのものとにらさり出で。いどうれしくたちよ  
らせ給へりつるまるとし。いとたへがたく思給へられつ



さかけり。美按。尺書往來。其特。佛頭。佛  
像。能。なる。ボウ。タリ。佛。像。の。心。を  
い。ま。の。ひ。ま。い。ま。の。こ。と。ば。な。り。め。づ。ら  
なる。に。や。伊。勢。物。師。に。ま。ま。に。買。取。に。て。ま  
ある。類。に。  
た。ゆ。ま。せ。給。は。ざ。ら。ん。ん。ん。よ。く。侍。べ。き  
油。斷。した。給。は。ぬ。が。可。然。か。ら。ん。ん。ん。

佛のあらはれたまへるこそおほゆれ  
「町」イ本には是より次の「きよげなるわらは  
の」さあるへつげたり  
ひげおひたれどおもはずにかみうるはしき  
舞はありながら。思ひの外に舞うつくしき  
え。な。げ。に。て。僧。の。い。ま。ま。な。さ。う。に。時。に。用  
ら。れ。し。ま。ま。え。  
こ。い。し。こ。に。や。ん。こ。な。き。お。ほ。え。あ。る  
陰。者。に。て。墨。匠。に。て。も。方。々。に。出。頭。し  
法師もあらまはしき

法師は聖さいひながら時にあはよしき  
「町」この間「あらまはしきわざなめれ」を  
イ本には「あらまはしきなるわざなめれ」を  
り。いづれにても同じ

きのせぬ  
のけくびしたる人  
のけたりにける人

るを。只いまおこたるやうに侍れば。返すくよるこびさ  
こえさする。あすも御いとまのひまには物せさせ給へな  
ごいひつゝ。いとまうねき御ものよけに侍めるをたゆま  
せ給はざらむなんよく侍べき。よろしく物せさせ給ふを  
るをなん悦び申侍ると。詞づくなにて出るは。いとたふと  
きに。佛のあらはれたまへるとこそおほゆれ  
是より別段に。僧家の使ひ人。小童子のさまに。大童子にや  
きよげなるわらはのかみながき。またかにはさやのなるが  
ひげおひたれど。おもはずにかみうるはしき。又したよか  
にむくつけくなるなどおほくて。いとなげにてこゝかし  
こにやんごとなきおほえあるこそ。法師もあらまほしき  
わざなめれ。おやなどいかにうれしからんごころおしは  
からるれ」  
見ぐるしきもの  
きのせぬひかたよせてきたる人。又のけくびきたる人。

れいならぬ人のまへに  
顔ふ人を見まふもの。なまなき子をつれゆ  
きした。病人のほせりにも幼童は遠慮なく  
さわがしき事あればなるべし  
「増」遠云。尋常よりすぐれて貴き人のまへに  
たりに小兒をつれ出るなるべし  
法師は陰陽師のかみかうふりしてはらへした  
る  
法師ながら陰陽師にて被なごする物に。道  
満法師など其類なるべし。宇治拾遺六。内  
記上人寂心。播磨の國にて。法師陰陽師の  
紙冠を着て被するを。何しに紙冠をきしぞ  
と問はれければ。被戸の神達法師を忌給  
へば被の程暫く着て侍るさいふに。上人紙  
冠を取て引破りて佛弟子さ成ながら。被戸  
の神達にくみ給ふとて。如来の忌玉ふ事  
を破りてまばしも無間地獄の業をばする事  
よしなしと制したる事あり

下すだれきたなげなる上達部の御くるま。れいならぬ人  
のまへに子をみていきたる。はかまきたるわらはのあし  
だはきたる。それはいまやうのもの也。つほさうぞくきた  
る物のいそぎてあゆみたる。法師。陰陽師のかみかうふり  
まてはらへしたる。又色くろうやせにくけなる女のかつ  
らきたる。ひげがちにやせくゝなる男どひるねしたる。何  
見にくき男のひるあらはに見るかひなきまをいふ  
見にくき男のひるあらはに見るかひなきまをいふ  
見えず。又おしなべてさる事となりたれば。我にくけな  
りどておきるべきにもあらずかし。つとめてどくおき  
過ぎて早朝に歸るがよきこと  
いぬるめやすし。夏ひるねしておきたる。いとよき人こそ  
今すこしをかしけれ。えせかたちはつやめきねばれて。よ  
うせすはほうゆがみもまつべし。かたみに見かしたら  
んほどのいけるかひなさよ。色くろき人のすゝしひとへ  
きたるいと見ぐるしかし。のしひとへもおなじくすきた  
きたるいと見ぐるしかし。のしひとへもおなじくすきた



筆もつかひはて、是をかき、筆もつくして早く此草紙を書はてんぞ

人やは見んずると思ひて

人の見るべき物ならばこそ遠慮もせめ。人やは見んと思へば里に居て徒然の慰みに書しと

きようつくし、すきさいさきよ、隠密せしに思ひの外に世にもれしと

「訂」万歳抄。此の「きようつくし」なりと思ふを「の下に」左中將経房卿の見付てしひてきりあげ給へれば」の廿一字あり

「枕より又しる人もなき戀をなみだせきあへずもししつる哉」古今

宮の御まへに云々

「増」弘云。是より此草紙をかきしわけないへるなれば。此の句の上にサテ此草紙ナカキシラケハ云云一句を添て解すべし。然らばよく心得らるべし

内のおさの奉り給へり

内大臣伊周公。后宮へ料紙を遣せられしと

史記さいふ文。前漢の司馬遷。三皇五帝より漢武帝までの事を書しと

さばえよとて給はせ

猶えり出て哥などをも

今此さうしに書出たる外に。猶もよく撰て哥などを何をも書て。物めかしくもつくりたればこそと

思ふほどよりはわろし心見えなり。物めかしく書たらばかへりて清少の書し物なれば

れど。紅なれば色黒きすきてもまざる。故に句

あらん

是より此草紙書し物なへり。々々などになりしとさなるべし

物くらうなりて文字もかゝれずなりたり。筆もつかひは

て、是をかきはてはや。此さうしは目に見え心にふもふ

事を。人やは見んずると思ひて。つれづれなるさとのほ

どにかきあつめたるを。あいなく人のためびんなきひ

すらしなどきつべき所々もあれば。さようかくしたりと

おもふを。なみだせきあへずこそなりけれ。宮の御まへ

に内のおさの奉り給へりけるを。これに何をかゝまし。

上のお前には史記といふ文をかゝせ給へるなどのたまは

せしを。枕にこそはま侍らめど中しかは。さはえよとて給

はせたりしを。あやしきを。こよやなにやと。つぎせずおほ

かる紙のかずをかきつくさんとせしに。いと物おほえぬ

事ぞおほかるや。大かた是は世の中にをかしき事を。人の

めでたしなご思ふべき事。猶えり出て哥などを木草鳥虫をもいひ出したらばこそ。思ふほどよりはわろし。心見えなりともせしられぬ。只心ひとつにかのづからおもふ事をたはふれに書つけれは。物にたちまじり。ひとなみくなるべきみもきくべき物かばと思ひしに。はづ

みて清少を心に、恥しき人いふ人もあればこそ。かききたる人も見る人はの給ふなれば。いとあやしくぞあるや。けにそれれもことわり。人のにくむをもよしといひ。はむるをもあしといふは。心のほどこそおしはからるれ。たゞ人に見えけんぞねたきや

いさあやしくぞあるや。かくおもひくたしたる草紙を見る人はづかしなごいへば。あやしく心得がたきと。やハ助字

げにそれれもことわり。彼耻かしさいふ人に對して尤きの心。いかにさなれば清少のやうに世にひがみて。其好悪人にながへる物の。其心中のよこしまなる事おしはかられて物むつかしき物なれば。かへりて恥かしさいへるも道理ぞと

たゞ人に見えけんぞねたきや。かやうに我が心中までおしはかられさまんく沙汰せらるゝも。此草紙の世人に見えたる故なれば。只人に見えびるまりたるがねたきと。或本に此をはりの詞の跡に「左中將またいせのかみさきこえし時。里におはしたりしに。はしのかたなりけるた、か

めたる也とぞあり。又奥書に云。深經房朝臣。四宮左大臣の三男。母は九條殿第五女俊賢卿の同母弟。伊勢守。長徳元年也。此草紙長保元二年の事多。書加歎云々。此本ニ左中將といへるは。此經房の事也。此人清少の里亭にまはしたるに。さし出たる巻にのりて。此草紙の出たるを。さりいれかきさんせしと。終に經房の取ておはして久しくとめてうつし給へるにや。それより此草紙世にひるまりありきたる也。さし出し物はさいへる物の助語也。此草紙にもあり。源氏物語にもある詞也。さて此奥書に。經房の伊勢守なりしは。長徳の事なるに。其後長保の比の事など。此草紙にあるは。後に書くはへたるかさの見えたり。此ゆみに此草紙に詳畧の異本様々ありせしとすべし。ての世に。昔戀しき心をべて書加られし事ありと見えたり。此ゆみに此草紙に詳畧の異本様々ありせしとすべし。



清少納言枕草子者中古之遺風和語之俊烈也并美於紫女源氏物語尤當閱翫之者也然未有選其義按其部考其辭者惜乎蓋有之未見之予自蚤歲好讀無敦志爲訓釋故平日覽古集每有意會則引事題書就思傍訊槩宣意義遂手自出寫以成十二卷以春曙抄爲名猶有疑而闕如之者惟夥更待後之博洽不強整說焉今也治隆俗美風雅盛起幸過此時命工彫梓廣流傳于市井也庶幾便和哥之人傲其詞花効其風流云爾

延寶二年甲寅七月十七日

北村季吟書

清少納言枕草紙裝束撮要抄目錄

櫻の直衣ナカユの事 附同し下襲袴衣袴長等の事

二藍フクロの事

香カのうすものハの事

卯の花の衣ウの事 附柳の衣の事

二三位の袍ホをまカらかしの葉ハにて染る事

六位藏人青色アヲの事 附青白アヲ椶サト麴ク座山鳩色魚腹の號又黃キ植染の御袍の事

蒲荷ハス染シの事

あはびハむすヒひノの事



皆練火色の事

ひのさうぞくの事 附どのあさうぞくの事

古今冠異なる事

細長汗衫からきぬうへの衣大口はかま指貫の事

はこえの事

草帯の事 附布袴鶴雪の比半靴をはく事

帯領巾の事

ひししりの事

〔増〕清涼殿の云々  
此段一卷に見えたり

清少納言枕草紙裝束撮要抄

○清涼殿の丑どらのすまこいへる段

かうらんのもとに青き瓶の大なるすゑて。櫻のいろしく  
おもしろきえだの五尺ばかりなるを。いとおほくさした  
れば。かうらんのもとまでこほれ咲たるよ。晝つかた大納  
言殿櫻のなほしすこしなよらかなるに。とき紫の指ぬき  
しろき御ぞども。うへにこきあやのいとあざやかなるい  
だしてまゐりたまへり

義按。櫻の直衣ハ。表白裏蒲萄なるものなれば。紫のさ  
しぬき白き御ぞといひつゞけらる。これにて表うらの  
いろかのづからあらはれたり。それ蒲萄はむらさき色  
なる物なればなり

又一説に。表白裏赤花ともみえたり。さくらは直衣にか  
ぎるべからず。下襲にも狩衣又は細長にももちふるい

弘云。六巻にさくらの御なほし云々。又十  
巻にもさくらのなほしにくれなゐの御ぞみ  
つばかり云々など見えたり



「増」すきにし方云々此段二巻にあり

ろなり

○すきにし方こひしきものといへる段

一ある。えびぞめなど

論人曰。ノアの反なり。但くれなゐといふときは反のよにちす約語なり

義按。一あるは赤花及青花をもて染とみえたり。それ赤花とは赤藍也。青花ハ青藍ともいふ。此故に二あるといふなるべし。或人曰赤藍は紅藍也。是和訓くれなゐとよめるは吳藍のめづれる訓なりといへり。そめやうひせらありと

「増」小しらかは云々此段二巻にあり

○小しらかはといふ所は小一條の大將どのの御家ぞかしといへる段

香のうすもの。ふたあるのなほし。おなじさしぬきこきすはうの御袴に。はりたるしろきひとへのいとあざやかなるを着給ひて

義按。香のうすものは夏のきぬなるべし。それ香いらは

玉璽承元四年二月十四日發西時へ夜仲基入道來陸三古事一知足院殿御着直衣一尺三寸子一陸たる香帷著之

下搔薄紅にして黄をまぜて織よし。三條裝束抄に見えたり。又或人曰香色は香のたきしみたる色によりたる名也。上の段心ときあきする物といへる所に。けさうして香にしみたる衣きたるといふがとし。只香色とて黄あかく染たるは心ゆかぬ事なりといへり。又こき蘇芳の御袴とは指貫の下袴なるべし

○木の花はといへる段

まつりのかへさに。紫野のわたり近きあやしの家ども。おどろなるかきねなどにいとしろう咲たるこそをかしかれ。青いろのうへにしろきひとへかさねかづきたる。あさくちはなごにかよひていとをかし

義按。此段卯のはなの衣にかよへる詞なれば。爰にこれり。卯の花の衣は表白裏青なるが故に青色のうへに白き單かさね。といひつゞけらる。下の段見る物はとい

「増」木の花は云々此段三巻にあり



〔増〕木は云々  
此段三卷にあり

へる所に。所の衆の青いろしらかさをけしきはかり  
ひきかけたるは卯のはなの垣根ちかうおほえて郭公も  
陰にかくれぬべうおほゆ。といへるに同じ心なり。又表  
白裏青なるを柳の衣ともいひて。十一月より正二月ま  
で是をもちふ。但柳のきぬの時は柳を織物にし。卯のは  
なの時はうの花を織物にして。その品をわかつと或抄  
にみえたり

○木はといへる段

まらかしなどいふもの。ましてみやま木の中にもいとけ  
どほくて。二位二位のうへのきぬそむるをりはかり芝葉  
をだにひとの見るめる

義按。衣服令に一位深紫衣。三位以上淺紫衣と見えたり。  
然るを後世作り紫になせるがゆゑにまらかしの葉をせ  
んじて。それにてそめ其上をふしかねにて染るにや。こ

〔増〕めでたきもの云々  
此段五卷にあり

れ古制のあらたまりぬるところのかんがへにもならんか  
しとしるせり

○めでたきものといへる段

六位の藏人こそなほめでたけれ。いみしき君達なれども。  
えしもぎ給はぬあや織物を心にまかせてきたる青いろす  
がたなどいともめでたき

義按。青いろは青白の縁ツギといへる略名にして。もと麴塵  
の別名也。それ麴塵の名は禮記の月令の注に書たり。又  
延喜殿寮式に青白の縁と載られたるこれ也。又山鳩  
色魚陵魚成本などいへるも此きぬの事也。或人曰魚陵ササユリとは

天皇の御料といへるところなるべし。まかるをぎよれう  
と名目すべきがため魚陵の字を用ふるにや。只魚陵  
といひて心ゆかぬ儀也。名目につきて文字をかふる事  
例あり。畢竟山鳩色魚陵などいへるは古き俗の名目な

依名目登文字之類  
熟練綾。延喜殿部司式。延喜殿抄。編練綾（寫  
敷）とある是なり。清て可レ讀ためなり  
熟紙。延喜式部省式。後世宿紙と書ス上と同  
心



るべしと。又飭抄に麴塵黃植染同物のやうに載られたる甚あやまり也。ひと、せ野宮卿と恐ながら是を論じて。後二條關白記。江次第。雲圖抄等已下をもて一物にあらざる事を申あきらめし。是あまねく人のしれる所也。彼卿も我も盛なりしころなれば。つとりてよしなき事を論じ。己不興となりたる事ぞくやしき。夫黃植染は弘仁以來。天子の正服として。上皇といへども着御の例なし。故に。天皇の服御に位色とある是也。抑麴塵は天皇襲の御袍なるか故に極腐これを申下して常に着用あり。こゝをもて心にまかせてきたる青いろすがたなどいへり。但。主上着御の日には着せずと侍中群要に見えたり。異なるはれには極腐にかぎらず第二の藏人已下雜しきまでも給りて着用の例あり又。上皇皇太子ハもとより親王公卿侍臣六位已上。野の行幸の時な

「増はかせの云々  
此段五卷にあり

弘云。二卷にふたあぬえびそめなどのさい  
でのおしへされて。四卷にえびそめのこき  
さしぬき。十一卷にえびそめのおりもの、  
なほし云々など見えたり

べて着用古例多しと

○はかせのさえあるはいとめでたしといへる段

一の人の御ありき春日まうで。えび染の織もの。すべて紫なるはなにもくめでたくこそあれ。はなもいともかみも。むらさきの花の中にはかきつはたぞすこしぬき。いろはめでたし。

義按。衣服令義解云。蒲荷者紫色之最淺者也とみえたり。又織蒲荷は經赤緯紫なり。故に紫なる品々よりかきつはたまでいひつゞけらる。これら又前段にあけたる青いろのうへにしるきひとへ。かさね。かづきたるなどいへるは。奇妙の文勢どもなり。又下襲にて表裏かけてえびぞめといへるは。表すはう裏花田なるをいへり。或えびぞめのさしぬき。或裏えび染。又えびぞめの織物など一色にていへるとわかちしるべし



「増」小忌のきんだち云々  
此段五巻にあり

る段

○小忌のきんだちは外にゐるものいひなどすといへ  
小兵衛といふが。あかひものどけたるを。是をむすはゞや  
といへば。さねかたの中將よりてつくろふにたゞならず。

あし引の山山麓ノ心のみづはこほれるを

いかなるひものどくるなるらん

といひかく。清少納言小兵衛にかはりて

うすごほりあはにむすべる紐なれば

かさす日影日影ノ心にゆるふばかりを

義按。それあかひもは。小忌の右の手もどにつくるもの  
なり。延喜式延喜式大日小齋親王以下皆青摺袍五位以上紅  
垂紐淺深相副とみえたり。然るを後世蘇芳の濃薄をになむす  
びにして用ひたり。又清少納言が返しにあはにむすべ  
るとはゆるびても又とけぬといふことゝるにいへり。其

伊勢物語云。むかしぬにもあらでたえたる人  
のもとに。玉の緒をあはをによりてむすべ  
ばたえての後もあはんとぞおもふ

「増」ほそだちの云々  
此段五巻にあり

弘云。七巻に「いれりの下がされなごみた  
れあひて云々」と見えたり

政事要略。衛門府風俗哥云  
多。多良女乃花乃加加爾利好平夜。説書也  
好平夜。

見ゆ

行事の藏人のかいぬりがさね。ものよりことにきよらに

るもいとなまめかしといへる段

あは、淡也。桃華葉葉に。杉の横目の扇のどちたる糸の  
あまりをあはびむすびにしてといへる事あり。これら  
にも通ひていとおもし。其たよりにもならんかし  
○細太刀の平緒つけてきよけなるをこのもてわた  
るもいとなまめかしといへる段

義按。搔練。後稱念院關白裝束抄曰。搔練下襲。火色下襲。  
各別物也。共爲赤色之間人存。同物之由。歟。是不可然  
云云。同抄曰。助無智秘抄曰。火のいろの下重はかいぬり  
とばかりたるものなり。火の色とは裏かもてとも打  
ものにて。中重中重を入たる也。かいぬりとは只うらは紅の  
はりたるにてなかへなき也と見えたり

「増」まげいしや云々  
此段六巻にあり

○清少納言枕草紙裝束撮要抄



弘云。九卷に豐院のえんがにて。ひのさうぞくうるはしくて。又十一卷ひのさうぞくくれなるのひと「云々」などあり

せはぎえんに、所せきひの御さうぞくの下がさねなどひきちらされたり

義按。ひのさうぞくとは。束帯の事也。宿衣直衣に對して畫の裝束といへるにや。むかしは御ゆるしなくて。宿衣直衣にては。主上の御まへへ出仕し侍らざる事也。宿衣とは衣冠の事也。直衣はとの宿直のさうぞくとて晴にはあらざる也。ひのさうぞくの事まちく説あれども。すでに下がさねなどひきちらされたりとあれば。たゞしく束帯とはきこえたり

○わびしけに見ゆる物といへる段

雨のいたくふる日。ちひさき馬にのりて前駈したる人の。かうふりもひしけ袍ホラも下がさねもひとつになりたるいかにわびしからん

義按。いかに雨ふりたりとも。今の世のかうふりならば

「増」わびしけに云々  
此段六卷にあり

「増」頭辨の御もさ  
此段七卷にあり

ひしふまじ。いにしへと今のことなるをまらしめんどこゝにあけたり

○頭辨の御もとよりとて。主殿司ヌシなどやうなる物を。まろせまにしにつゝみてといへる段

きぬなどにすゝろなる名をもつけけんいとあやし。きぬの名にはそながのさめいひつべし。なぞかきみしりながといへかし。そのわらはのきるやうになぞからきぬはみじかききぬとこそいはれ。されどそれはもろこしの人のきるものなればうへのきぬのはかま。さういふべし。下がさねもよし。又おほくちながさよりくちひろければ。はかまもいとあちきをなし。さしぬきもなぞ。あしきぬ。もしはさやうの物はあしきくる。なごもらへかし

義按。細長は。かりきぬの。くびかみのやうにたて三はたはりの物也といへり。こゝをもて細長はこもらひ



十二  
つべしといへるなるべし。さくらの細長なでしこの細  
ながなど、或記にみえたり。又かきみ。下の段かきみは  
といへる所に。春はつゝじ櫻。夏は青くちは。朽葉とい  
ひ。上の段作物所の別當する比といへる所のせに。櫻の  
かきみ。萌黄こうはいなどいみしくかきみながくしり  
ひきてといへり。こゝをもてかき見のしりながといへ  
かしといふなるべし。新葉集。兼昌が哥に。もろ人のあ  
そふなる哉少女子がかきみのすそのながき世ぞかし  
とみえたり。雅すけ装束抄に。着用の次第より裁縫よで  
くはしくしるせり。又からきぬ。下の段からきぬはとい  
ふ所に。あかぎぬえびぞめもえきさくらすべてうすい  
ろの類とみえたり。禁秘御抄に。上藤不謂是非、二三位  
興侍號、上藤着赤青色候御陪膳也と見えたるも是也。  
雅すけ装束抄曰。上藤の女房のいろをゆるといふは。青

十三  
いろ赤いろのおりものゝからきぬ地ずりの裳を着るな  
りといへり。此事紫式部の日記にも委しくみえたり。さ  
れど此書のためにはいさゝか心ありて源氏によりたる  
注釋までも用ひ侍らざる也。和名抄に背子としるして  
和名からきぬと訓じ。形如半臂、無腰欄之袷衣なりと  
見えたり。こゝをもてなぞから衣はみじかききぬとこ  
そいはめといへる成べし。又うへの衣。和名抄に袍。和  
名うへのきぬ。一朝服とみえたり。又下がさねもよしと  
は。名目にたがひなくうへのきぬの下がさねなればな  
り。下の段したたがさねはといへる所に。冬はつゝじかいね  
りがさねすはうがさね。なつはふたあゐしらがさねと  
みえたり。又大口ながさよりくち廣ければとば。いにし  
へは裁縫今にことなるもしらねど。もし小口の袴に對  
して大くちといふにや。其こくちの袴は。主上御鞠あ



そはすとき着御のよし。大槐秘抄に見えたり。又袴いとあぢきなしとは。神代卷に投其禪ハカマこれを開嚙神といへる下心にてあぢきなしといへるにや。又さしぬきあしぎぬ足ぶくろなどいへかしたは。狂言綺語一興有文章也。和名抄には奴袴と志るしてさしぬきと和訓せり。雜令に官戸奴婢三歳以上毎年給衣服條に。冬布襖袴と見えたり。是なごによりおこれるにや。西宮記に。古時、有制臣下不用。近代五位以上及昇殿六位皆用之とみえたり。其古時有制とはも奴ヌの袴なるゆゑにや。蓋後世織物綾平絹等をもて裁縫し。若仕より老耆に至るまで深淺色をわかち。

上皇親王よりはじめ奉り。攝清諸家にいたりて地文織やうの品く。装束諸抄にくはしく志るし給ひ。已に一の制となれり。しかれば今さらいふべき事聊もなし。但

此書の下の段さしぬきはといへる所にむらさきのこきもクイうすき。夏は一藍いとあつき比夏むしの色したるも涼しげ也とみえたり。又まさすけ装束抄に。夏のさしぬき二藍るり色うすいろ織あさぎしをんいろと見えたり。夏むしのいろしたるとりるりいろをいふにや

○うらやましきものといへる段

女メのつばさうぞくなどにはあらでた、引はこえたる義按。引はこえたるとは。ひきあげたる也。男の束帶するにうしろの三角の所をはこえといへり其かんがへにもならんかすと爰にあげたり

○雪たかう降てといへる段

五位も四位も色うるはしう若やかなるが。上のきぬの色いとよきに。かはおびのかたつきたるをとのあすがたにひきはこえて。むらさきのさしぬきも雪にはえて

〔増〕うらやましき云々  
此段八卷にあり

弘云。十卷かはおびのかたつきたるをとのあすがたにひきはこえて」と見えたり

〔増〕雪たかう云々  
此段十卷にあり



弘云。六卷に。ふかくつはうくわなどはき  
て廊のほどなくつすり入るは」ともあり

和名抄曰。金腰帯唐唐唐唐云。左右金  
大將軍各一人紫緋緋金腰帶  
後二條關白記。寛治七年三月廿日丁酉。霜  
降晴卯時。裝束辰社參。六條院。予櫻前二下  
重封地平緒緋緋物屋文帶云々

こさまさりたるをきて。あこめの紅ならずおどろしくし  
き山ぶきを出して。からかささをさしたるに。風のいたく吹  
てよこさまに雪を吹かくれば。すこしかたぶきてあゆみ  
くる。ふかくつはうくわなどのきはまでゆきのいと白く  
かゝりたるこそをかしけれ

義按。かほの帯のかたつきたるとは。有文の帯と聞えた  
り。和名抄曰。唐衣服令云。革帶玉鈎注云。令按革帶以其  
所附金玉石角等爲名。有白玉帶。隱文帶。馬腦帶。波斯  
馬腦帶。紀伊石帶。出雲石帶。越石帶。斑犀帶。烏犀帶。散  
豆帶等其體有純方丸柄櫛上等之名革帶是其惣名也。と  
見えたり。又とのゐすがたにひきはこえて。むらさきの  
さしぬきとは。是布袴といふなるべし。雅すけ裝束抄に。  
ほうこの事きぬさしぬきうるはしくきて。其うへにし  
たがさねきて。うへのきぬにしりつくりて。おびさして。

さくをもつなりとみえたり。又あこめの紅ならずおど  
ろしくしき山吹を出してとは。是紅のふるびて黄いろ  
に見ゆるをいへるにや。下の段ひとへはといへる所に。  
色黄ばみたるひとへなどきたるは心づきなし。といへ  
るに同じ。又寶物集に。紅の戀の涙のいかなればはては  
くちばと成ぞかなしき」と右大辨親宗のよめる心也。其  
あこめとは。赤染の略訓なるべし。正式は紅なるが故な  
り。こゝをもて或もえぎ。或薄色なるは染あこめといへ  
り。あこめの字。延喜式には單の鶉給鶉とみえたり。其  
外裝束諸抄。多は裨の字をもちひ。或は和の字を用ひら  
る。文字のこゝろによれば。延喜式可ならんか。猶たづ  
ぬべし。又ふかくつはうくわなどのきはまで雪のいと  
白くかゝりたるとあれば。半靴も雪のときはくにや。騎  
馬のときならでは用ひざるやうにおぼえたり。依てこ



こにあげたり

○御經のとにあすわたらせおはしまさんとてといへる段

采女八人馬にのせてひき出めり。青すそこの裳。くたいひれ。などの風に吹やられたるはいとをかし。ぶぜんといふうねめはくすしあげまさがる人なり。えびぞめのおり物のさしぬきされば。しげ正は色ゆるされにけると云々

義按、裙帯は肩にかけ、領巾は項の飭のよし。或記にみえたり。今の世にはありともき、およびぬなり。又女のさしぬき着る事は是馬にのれば也。いにしへは掌侍命婦も馬にのれる例あり。又しげ正はいろゆるされにけるとは。延喜彈正式に。凡婦人得着夫衣服色、といへる下心にて。采女豊前がえび染の織物のさしぬき着たるをたはふれていへるにや

○上の段まつりの比はといへる中に

けいしぐつ。などのを<sup>緒</sup>すげさせ。うら<sup>緒</sup>をさせなどもてさわぎ

義按、けいしぐつとは、履子とかけり。和名抄沓の部。山槐記等にもみえたり。これは淺ぬりのあしだをいふにや。古き賀茂まつりの圖にも見えたり。枝あふぎといへる段に。高きけいしをさへはきたれば。といへるもこれにてよくきこえたり。異邦のおこりは。晋文公、臣介之推が事にはじまれり。此一段は。上の段の文なれば。發端にもかくべきを。予がなせる趣向は衣服の事にて筆をとめて。其餘のとは畧しけるに。或人此儀分明ならざるよしにてたづねられしを。又こゝにしるせるのみ

〔増〕御經のとに云々  
此段十一卷にあり

弘云。くたいひれの事所々に見えたり。五卷なまめかしき物の條。六卷つくも所の別當はの條。九卷みる物はの條などに見えたり

裙帯。北山抄。女禮服上略。其裙帯紫綠中合如。幘紐。兩端縫形。不用。簪用。是位驗也。義按。衣服令云。裙帯。是也乎。領巾。延喜禮殿寮式。中宮春字篇云。領巾四條料紗三尺六寸。條別九尺

〔増〕まつりの頃は云々  
此段一卷にあり

弘云。けいしぐつとは二物の名なること  
上の一卷に註しおきたり



清少納言枕草紙裝束抄一卷は壺井先  
生兼て先達注し置く、諸抄に漏れた  
る事のみを拾ひて古記文に考へ二三  
子のために著述せらる、所なり然る  
に上坂兼勝予に就て剗腕に命せん事  
を請予も亦同志に示すの幸を好して  
聊校合を加へ新に寫しめ上坂氏の望  
に任する事ふかり

享保己酉歲初夏

門人 多田義俊書

縣居真淵翁原著  
加藤千陰大人序  
村田春海大人跋

香乃色阿公



清少納言枕草紙裝束抄一卷は壺井先  
生兼て先達注し置る、諸抄に漏れた  
る事のみを拾ひて古記文に考へ二三  
子のために著述せらる、所なり然る  
に上坂兼勝予に就て剗腕に命せん事  
を請予も亦同志に示すの幸を好して  
聊校合を加へ新に寫しめ上坂氏の望  
に任する事とかり

享保己酉歲初夏

門人 多田義俊書

二十

縣居真淵翁原著  
加藤千陰大人序  
村田春海大人跋

香乃色阿公



二  
吾縣居のうしをみな歌書むすやうのかさねの料にごてきぬの色めのを  
かしきをぬき出てしるされたるを寫して人々のもたるにはいさうつしあや  
まれるなむすくなからぬこはむら田氏そのもこつ書によりて猶よくたし  
たる也さて此色めはかのうすやうのみにあらず屏風さうしなごにおすなる  
しきの染色折ひつのをりたて洲はまの地しきあるはひけこゆひつくるいと  
の色あひ草木の根つみやうのみやひ事にも此色めにならひてものするわ  
さなるを其時にのそみてとみにおもひよりかたきこもあるをさるをりに  
いとたやすく見いてむためにもたよりよろしけれはとて板に系りたる也け  
りそのわきいさゝかはしつかたにしるしつ

千 蔭

# 欠



# 欠

右のいろくは懷紙の染うすやうをかさねたまはむためにあらく書いたし侍るなりその時にしたかひて色をとり合せまたは歌のやうによりて心しらひあるへしたとへば櫻のうたをさくらがさねの紙にかくなどは常の事なりもしさくらの歌にてもちりゆくを雪に見む時は雪によせある色にても又青葉がちならんをおもはゞもえ木なごをもちふべしかゝるたぐひをりにふれてをかしくこりなさんところにまかせたまへ

眞淵

このかさねの色あひは紀のとの、女房のもとにて縣居の翁の書ておくられし也古き家記装束の抄どもには猶さまゞの名もこれかれ見ゆれど女房の懷紙こりかさねんためにはたゞかくてたりぬへければとてもらされたるもおほかりきさてこはふるき抄ごもよりとうでられたるにてみなそのよりどころあれどかゝるもの、事しげからんはうち見るにわづはしければ本書の名をばはぶきてあげられざりしなり

春海



右かさねのいろあひ一卷は、往にし寛政の頃、縣居の眞淵翁が紀州侯の女房達の歌かゝむ薄様の重ねの料にて、ものせられたるものなり。さるをつぎつき書き寫さむには、誤りも出来ぬべしとて、村田春海大人が校合して、みづから板下をかきて、翁の跋文をも出し、又學友加藤千蔭大人が、この書の應用の極めてひろきよしを述べられたるものを序文として、出版せられたるものなれば、世にめづらしき書といふべし。今回参考圖書追加の舉に際し、附録としてここに掲げたり。

大正十一年三月

佐藤仁之助しるす

◎枕草紙春曙抄奥附

明治廿六年七月四日第一版印刷 同廿六年七月十三日第一版發行  
 同廿七年十月廿一日訂正二版印刷 同廿七年十月三十日訂正二版發行  
 大正十一年三月十日再訂増補卅七版印刷 同年三月十五日再訂増補卅七版發行  
 大正十二年四月五日改訂増補第卅八版印刷  
 大正十二年四月十五日改訂増補第卅八版發行



定價金貳圓卅錢  
 送料二十錢

原著者 故人 北村季吟  
 相續者 北村元部理代人 吉川半七  
 訂正増補者 故人 鈴木弘恭  
 改訂増補者 佐藤仁之助  
 發行兼印刷者 東京市本郷區本郷五丁目八番地 青山清吉

發行所

青山堂書房

東京市本郷區本郷五丁目八番地

振替口座東京二一七七番



21383



終